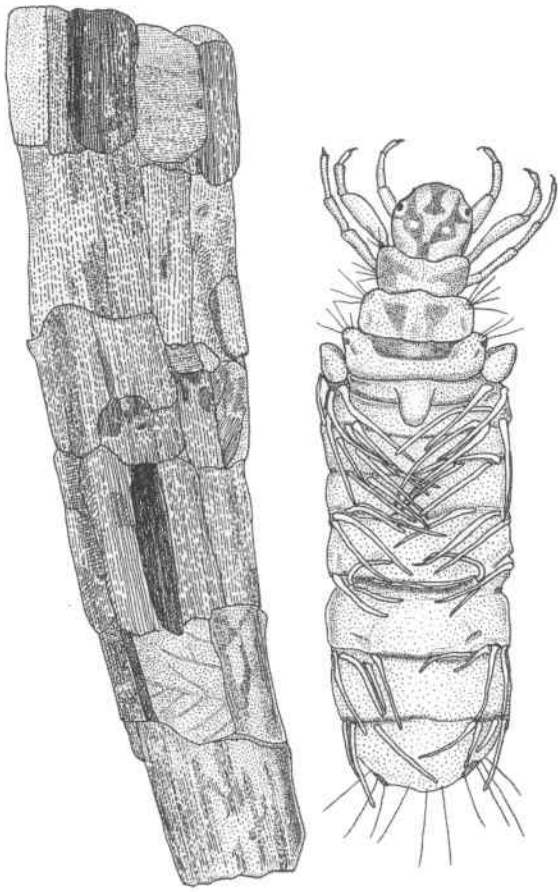
紀　　要

第 19 号



《平成 22 年度》

茅野市八ヶ岳総合博物館

表紙　点描画「ムラサキトビケラ幼虫と巣」

第19号発刊によせて

当博物館では常設展示の他、各種企画展、ふるさと講座、ロビー体験講座等を開催し、市民により興味・関心をもって参加していただけるよう苦心しているところです。本年の活動については本文中に活動報告を行っているところですが、その一部を少し振り返ってみたいと思います。

平成22年の諏訪地方は、諏訪大社の御柱祭によって幕が開きました。その準備は昨年度から始まっておりましたが、1月15日の抽選会を経て、それぞれの地区が担当する柱が決まると、急激に盛り上がりを見せました。当館でも「山出し」終了直後から、市民から提供していただいた写真データを中心に、急きょロビーでの写真展を開催することとなり、「里引き」終了後にはその写真も加え、11月まで来館者にその興奮をお伝えすることができました。

平成22年度の写真展は「花と蝶　春・夏」とし、会期を2回に分けて開催しました。花の写真については今井建樹先生より寄贈を受けた10万点に及ぶ寄贈フィルムから厳選して展示しました。また、蝶の写真は当館に事務局を置く「茅野ミヤマシロチョウの会」の協力を得て、季節にふさわしい写真を選定していただきました。

企画展は、「茅野市の古代～縄文時代と現代を繋ぐもの～」を取り上げました。これは茅野市が全庁的に取り組む「縄文プロジェクト」に基づき、博物館の視点から企画したもので、あまり展示する機会のない縄文時代以降の考古遺物を尖石縄文考古館からお借りし、当館で所蔵する民俗資料とを併せて展示することにより、はるか5000年前の縄文時代が、より身近に感じられるように工夫しました。石と鉄など、素材の違いはあるものの、その道具の形態がほとんど変わらないままであることに驚かれた来館者も多かったのではないでしょうか。

一方、当館のふるさと講座やロビー体験も、例年通り様々な講座を実施しました。その中で、毎年多くの受講者を得て好評の「花かご」や「びく」づくりの講師をお願いしていた竹松安治さんは、今年度が最後とのことで残念ではありますが、これまでのご協力に感謝いたしたいと思います。また、当館の元館長であり、毎年「つる細工」づくりの講師をしていただいていた両角源美先生が8月に急逝され、予定していた講座が開催できなくなりました。まだお若く、今後の博物館の運営にもお力を貸していただけると期待していた矢先のことで、残念でなりません。謹んでご冥福をお祈りいたします。

来館されたり、博物館活動にご協力いただいたりした多くの方々に感謝し、本年もここに当館の紀要を刊行できることを感謝いたします。

平成23年3月31日

茅野市八ヶ岳総合博物館
茅野市八ヶ嶽岳麓文芸館

目　　次

Ⅰ　茅野市柳川、上川の定期定点観測による５年間の水質記録

１　はじめに

私たちは、私たちの生活に深い影響を与えている八ヶ岳から流出してくる川水の水質について、観測定点を柳川に３点、柳川が上川に合流した後に１点、計４定点を設けて 2005 年 11 月より定期的に観測している。観測項目は、気温、水温、pH、電気伝導度である。観測地点は、図１に示したように、柳川では上流から美濃戸、大泉山東の多留姫神社、小泉山西の下古田、上川と合流した後の本町東（御座石神社東）の４地点である。また観測器具チェックのため、水質の変動の少ない当博物館の水道水

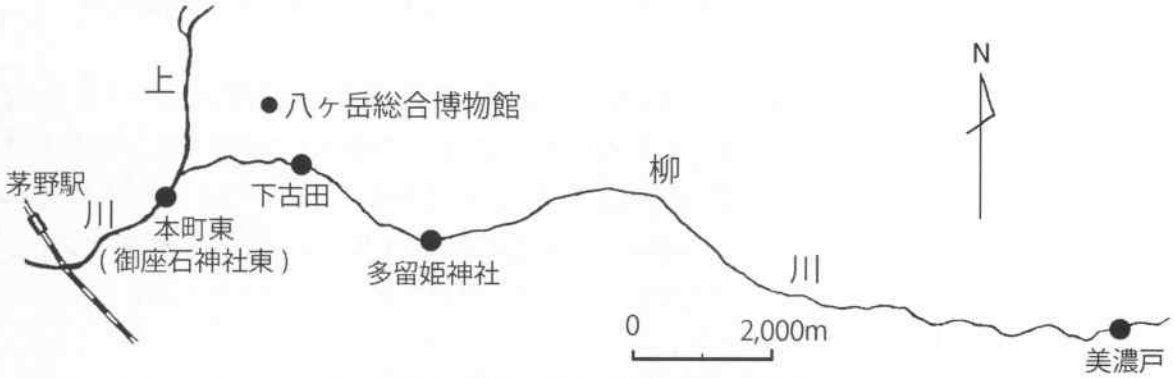


図１茅野市柳川、上川の定期定点観測地点

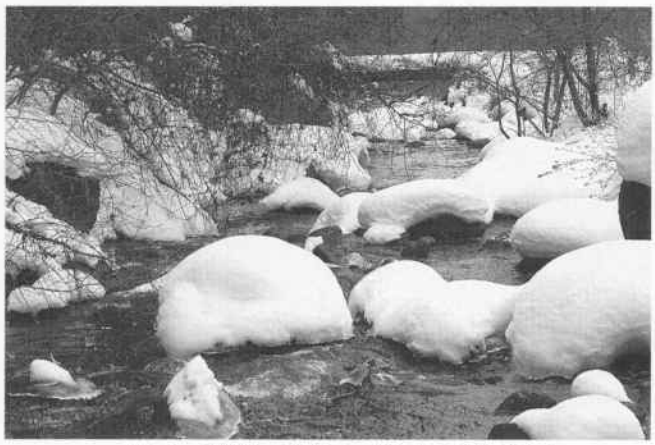


図２　柳川、美濃戸　'11 年２月 20 日

図３　柳川、多留姫神社　'11 年２月 20 日

図４　柳川、下古田　'11 年２月 20 日

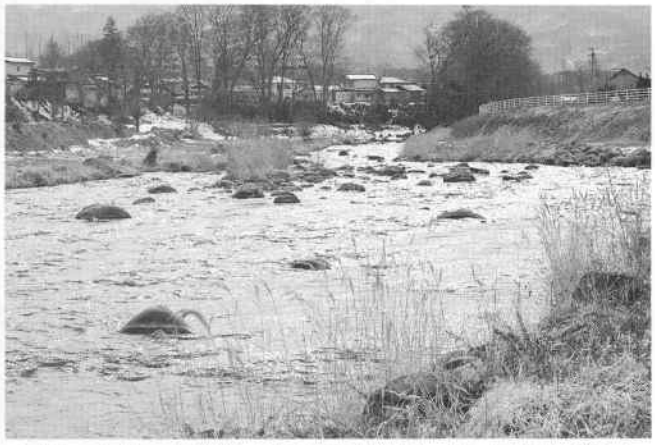


図５　上川、本町東（御座石神社東）　'11 年２月 20 日

も同時に測定した。

観測地点の標高は、美濃戸が 1,500㍍、多留姫神社が 1,000㍍、下古田が 900㍍、上川本町東（御座石神社東）が 800㍍である。柳川の流程は美濃戸観測定点から上川観測定点までおよそ 20㌔である。

観測地点間の距離は、美濃戸から多留姫神社まで 12 ㌔、多留姫神社から下古田まで 4.2 ㌔、下古田から上川本町東まで 3.1 ㌔である。

調査は毎月中旬を目処に行った。調査器具は次に示した。

(1) 気温、水温：水銀温度計…標準温度計との差で補正

(2) 電気伝導度：HORIBA 電気伝導率計 ES-51 ハンディタイプ（前に使用していた YOKOGAWA MODELSC-82 は、2010 年 1 月まで使用していたが、その値が不安定であり、信用できなかったので測定値も廃棄して HORIBAES-51 に交換した。2010 年 2 月からその測定値を採用した）

(3) pH：KKK・水素イオン（pH）比色計、基準科学研究所…比色管は定期的に新品と交換

1　気温・水温の変化

各地点における気温・水温の変化は図 6 ～図 10 に示した。気温は観測時間が月によってまちまちであり、正確に比較することはできないが、年変化の様子のおよその傾向はつかめるかと思いグラフ化しておいた。毎年気温・水温ともに 3 月を過ぎると夏場にかけて急に高くなっていくが、6 月 7 月は梅雨の影響で山が二つになる年もある。9 月を過ぎると急激に下がっていく。図 6 柳川美濃戸の気温・水温グラフの縦軸は他地点のそれより 5℃下方にとってある。それでちょうど他と釣り合うくらいである。標高が高いほど気温・水温が顕著に低い。

まず、図 6 の柳川、美濃戸で水温の一番高かったのは 2006 年 9 月 18 日の 13.5℃であった。最高水温が 9 月にずれ込んだのはこの年だけで、あとの年は 8 月に最高を示す。最低は 2008 年 1 月 17 日の 0.6℃であった。最低水温を示すのは毎年ほぼ 1 月であり水温は 1℃前後である。したがって柳川の美濃戸付近での水温変化は毎年 1 ～ 13℃であり、その差は約 12℃の範囲で変化している。

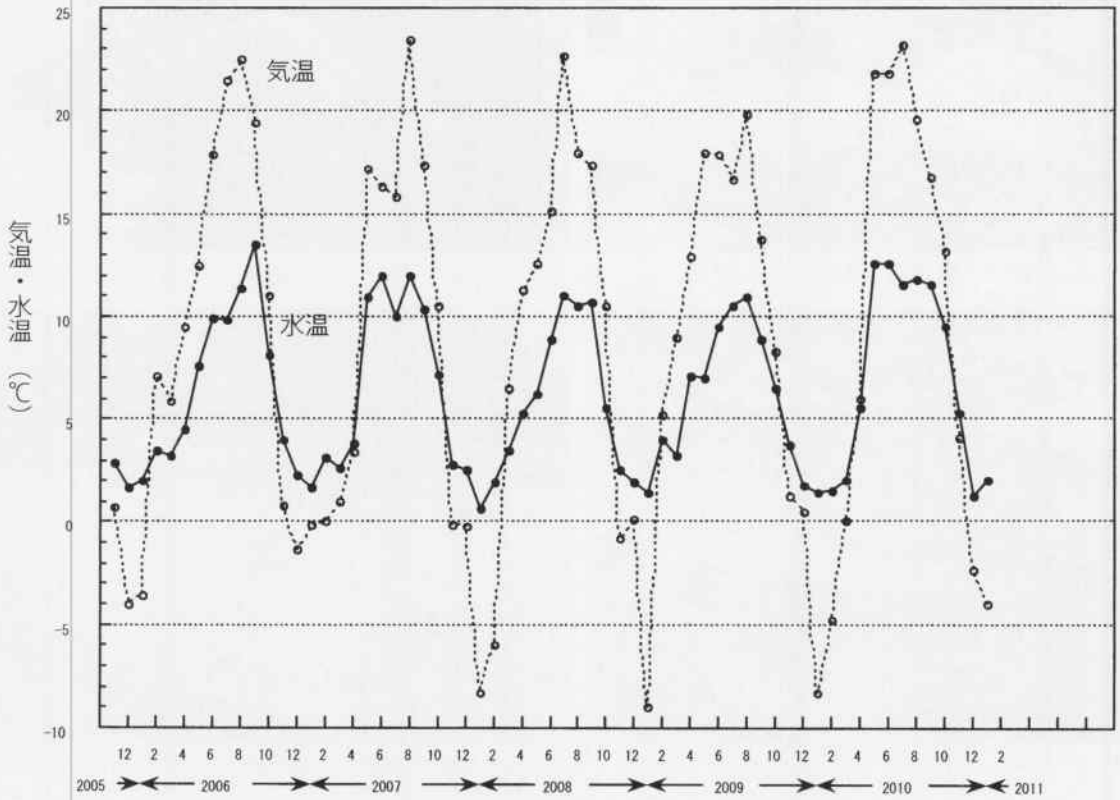


図 6　柳川、美濃戸 気温・水温の変化（2005 年 11 月～ 2011 年 1 月）

次に、図 7 の柳川、多留姫神社では最高水温は 2007 年 8 月 16 日の 20.1℃であった。2008、2009 年の夏は割合低い水温で推移しているが、5 年間を通してみると最高水温は 20℃である。最低水温は

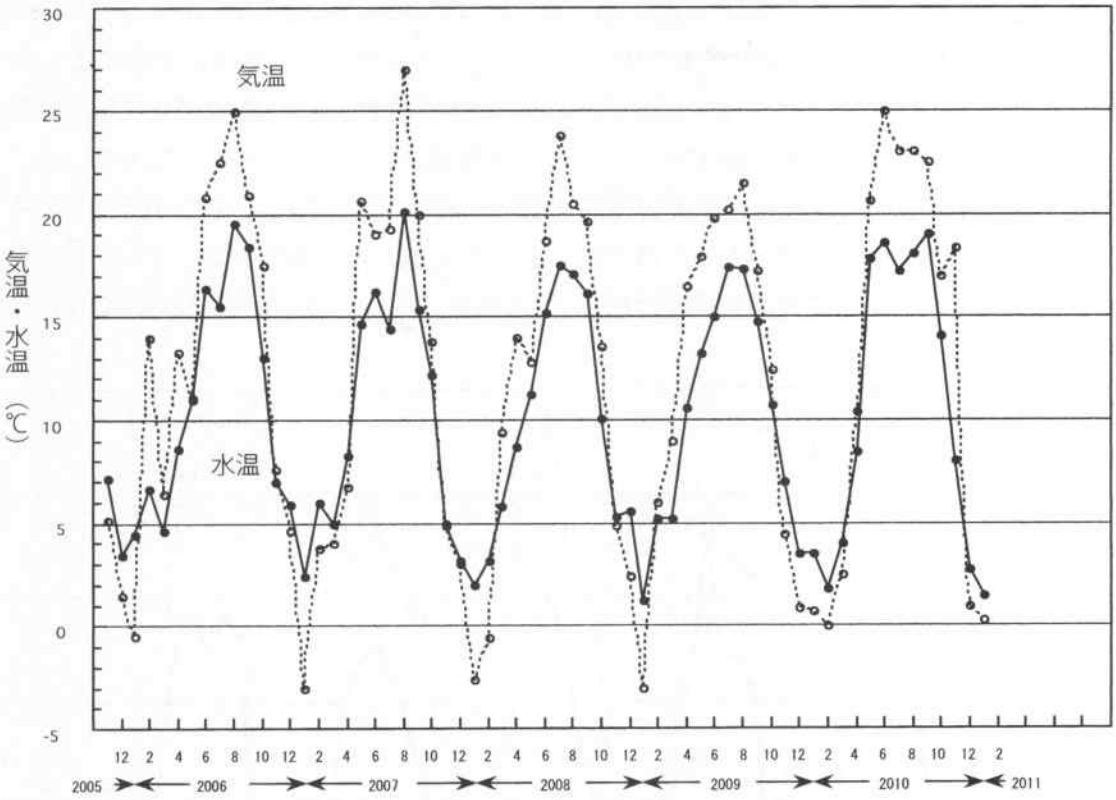


図7　柳川、多留姫神社 気温・水温の変化（2005年11月～2011年1月）

2011年1月19日の1.5℃であった。最低水温は毎年2℃前後で推移する。柳川、多留姫神社での水温は毎年2～19℃であり、その差は約17℃の範囲で変化している。上流の美濃戸より約5℃ほど大きな変化の仕方である。

次に、図8の柳川、下古田での最高水温は2007年8月16日の22.2℃であった。2008、2009、2010

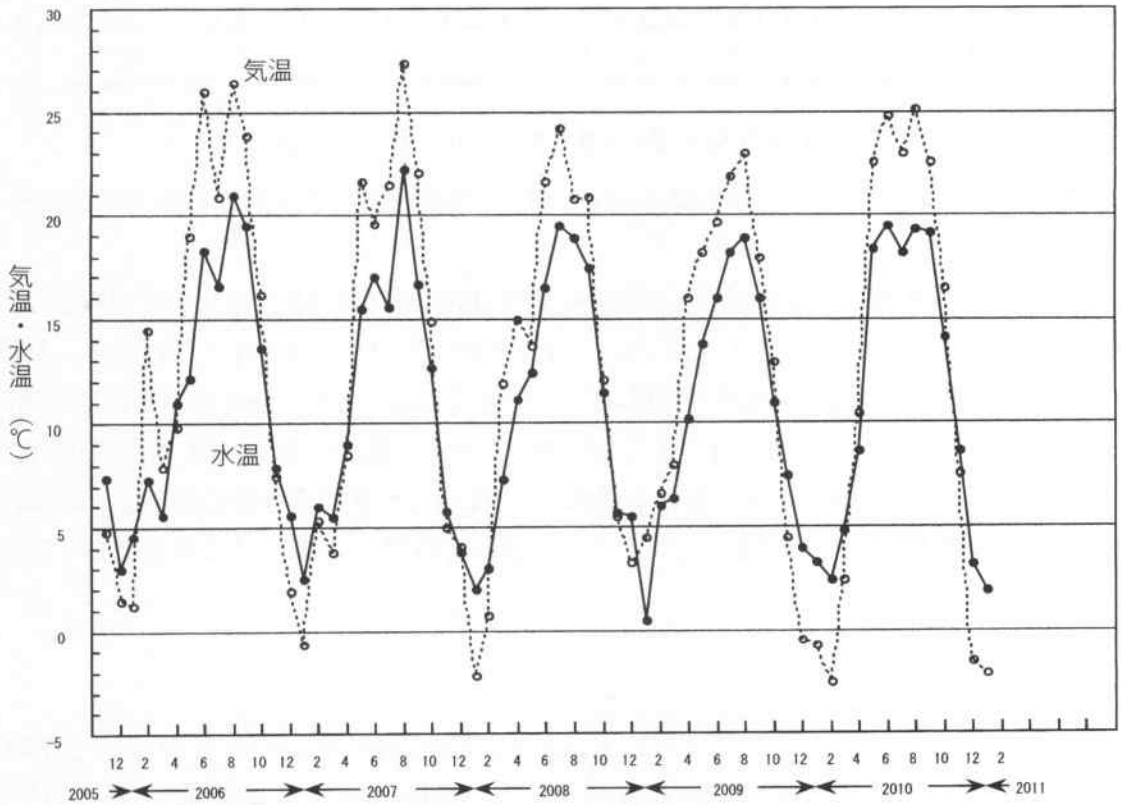


図8　柳川、下古田 気温・水温の変化（2005年11月～2011年1月）

年の夏は割合低い水温が続いた。2010 年の定期観測日にはやや低い水温であったが、この年の夏は全国的に平年よりかなり暑い日々が続いた年であった。下古田の毎年の最高水温は平均すると約 20℃前後である。最低水温は 2009 年 1 月 16 日の 0.5℃である。毎年の最低水温は平均すると 2℃前後である。したがって、下古田での年間の水温差は約 18℃であり多留姫神社より 1℃大きくなっている。

次に、図 9 の上川、本町御座石神社東での最高水温は、2007 年 8 月 16 日の 23.0℃であり平均すると 19℃前後となる。最低水温は 2011 年 1 月 19 日の 1.5℃であった。最低水温は平均すると約 3℃である。したがって上川本町での年間水温差は約 16℃であり、柳川、下古田より標高は 100 ㍍低いに

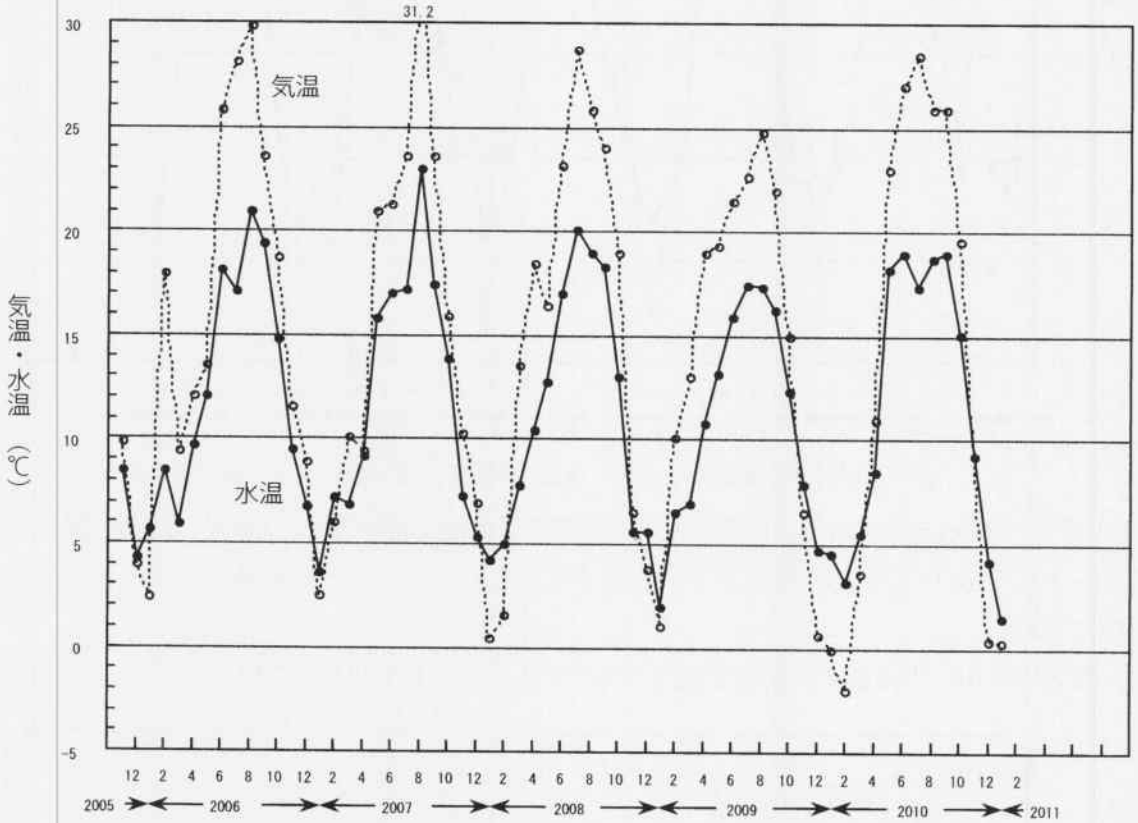


図 9　上川、本町東 気温・水温の変化（2005 年 11 月～ 2011 年 1 月）

もかかわらずその差は 2℃小さい。それは上川には多くの支流が流れこみ水量も多いことから、変化が小さいのであろう。

最後に、図 10 の博物館の水道水である。最高水温は 2008 年 10 月 18 日の 27.8℃である。水温が異常に高かったのでしばらくかけ流しにしておいて測ったがこれ以下には下がらなかった。原因はわからない。毎年の最高水温はこの時を外せばほぼ 22℃前後である。ただ、川の定点観測での最高水温は常に 8 月であったが、水道水では 9 月にずれ込む傾向にある。最低水温は 2006 年 2 月 15 日の 9.6℃、翌年 2007 年 2 月 25 日の 9.4℃であった。水道水でも 9℃あたりまで下がるのである。毎年の最低水温は平均すればほぼ 11℃前後である。したがって水道水の年間水温差は 11℃前後であり自然の川での変化よりかなり小さい変化である。

2　pH の変化

pH（ペーハー）は、図 11 ～図 14 のように水温の高いときに pH も高い傾向にあるようであるがあまり顕著ではない。下流に行くにしたがって上がっていく傾向にあり、多留姫神社から下流では 7.0 を上回る月が多くなっている。

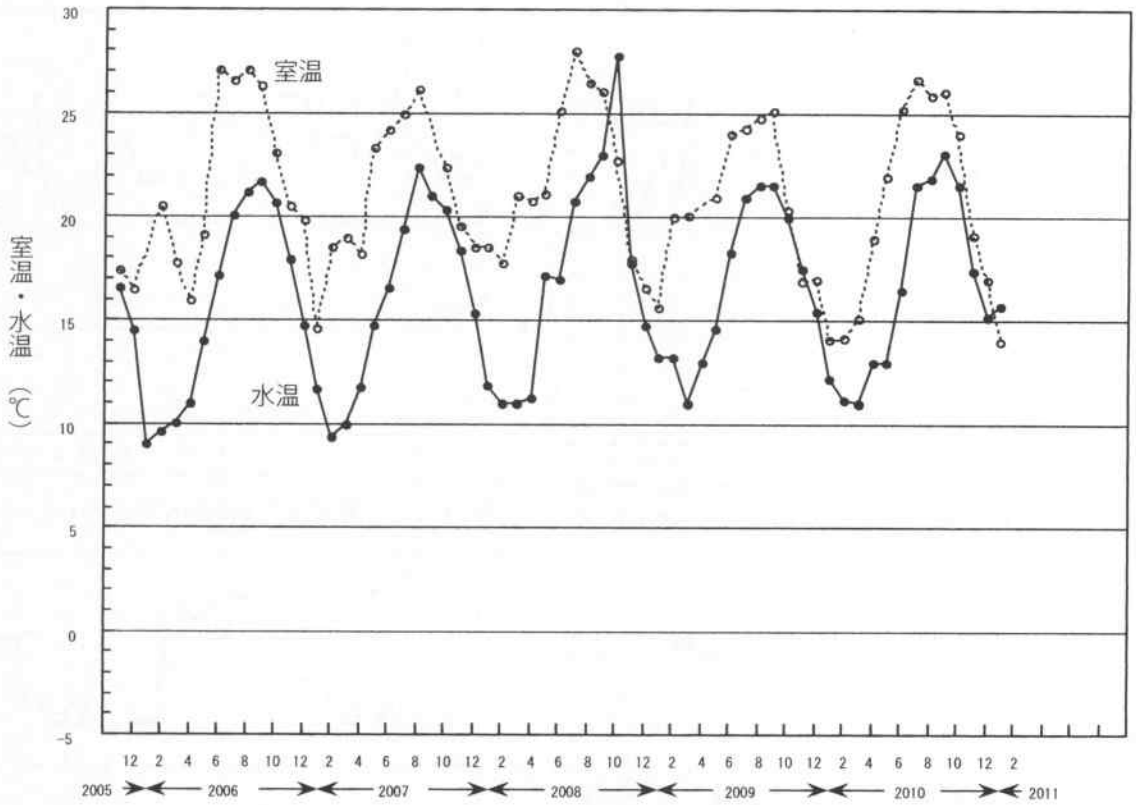


図 10　博物館水道水 気温・水温の変化（2005 年 11 月～ 2011 年 1 月）

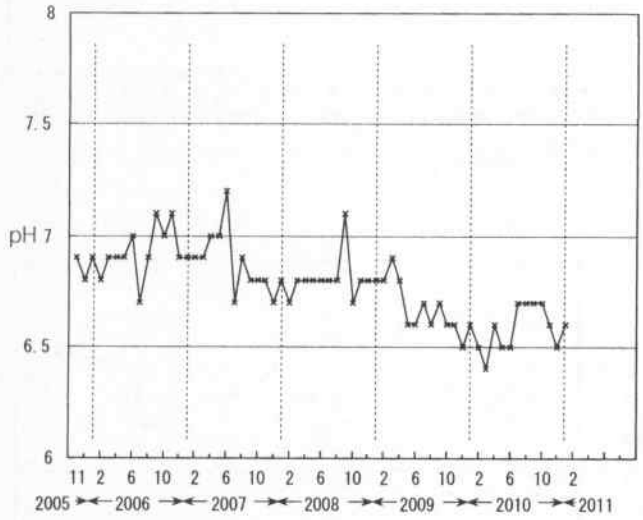


図 11　柳川、美濃戸の pH 変化 (2005 年 11 月～ 2011 年 1 月)

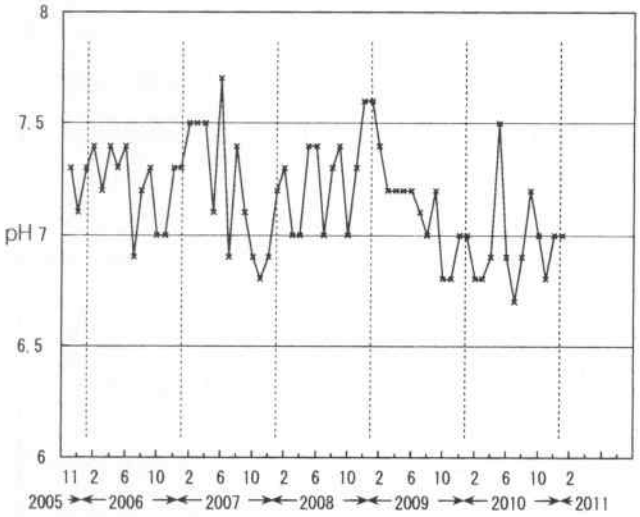


図 12　柳川、多留姫神社の pH 変化 (2005 年 11 月～ 2011 年 1 月

まず、柳川、美濃戸では図 11 のように鉱泉の影響を受けてほとんどの月で 7.0 を下回って弱酸性の状態にある。

次に、図 12 の柳川、多留姫神社では前記したように 7.0 を上回る月が多くなる。

さらに下流の図 13 柳川、下古田では 7.0 を下回ることはなくなっている。2006 年 7 月を除けばほぼ水温の高い時期に pH も高い値を示すようになっている。これは他の地点も含め同じ傾向にある。

次に図 14 の上川、本町東（御座石神社東）ではわずかではあるが、平均的に上流より上回っている。白樺湖・車山・霧ヶ峰方面からの支流が流入して流量もかなり増え、pH 値も上がっている。2006 年 8 月 2 日の 8.2 の値は突出しており、上流でセメントを使ったような工事が行われていたのではないかと

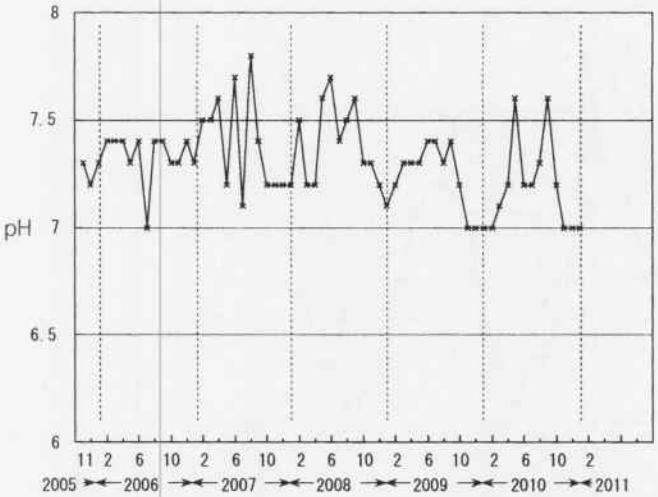


図 13　柳川、下古田の pH 変化 (2005 年 11 月～ 2011 年 1 月)

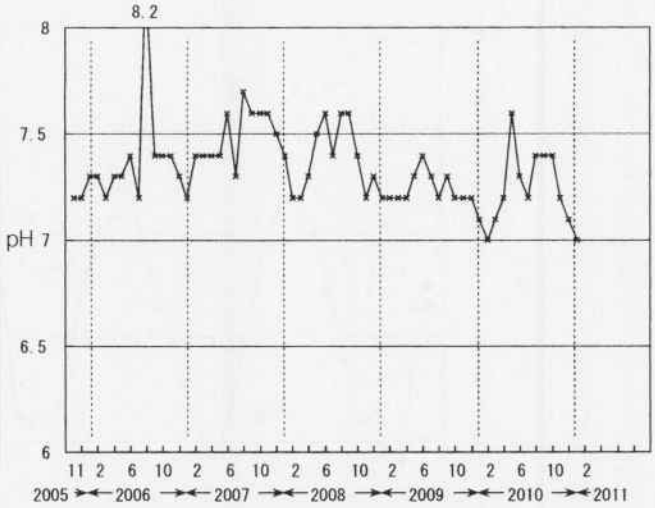


図 14　上川、本町東の pH 変化 (2005 年 11 月～ 2011 年 1 月)

推測される。

図 15 の水道水はあまり一定の傾向は見られない。

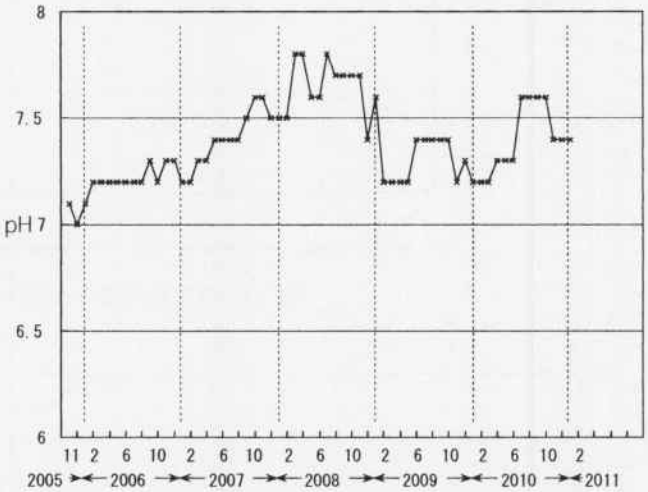


図 15　水道水の pH 変化 (2005 年 11 月～ 2011 年 1 月)

3　電気伝導度の変化

各地点の電気伝導度の測定結果は図 16 から図 20 に示した。前記したように、2010 年 1 月まで測定していた Yokogawa Electric Corporation 製の電気伝導度計 MODEL SC82 の値はふらつきが認められたので、それまで測定していた結果は廃棄して、2010 年 2 月から HORIBA 電気伝導度計 ES-51 ハンディタイプで測定している。

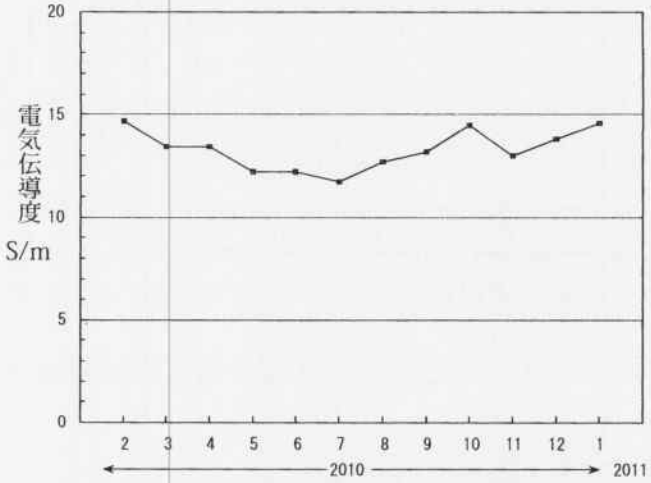


図 16　柳川、美濃戸の電気伝導度の変化

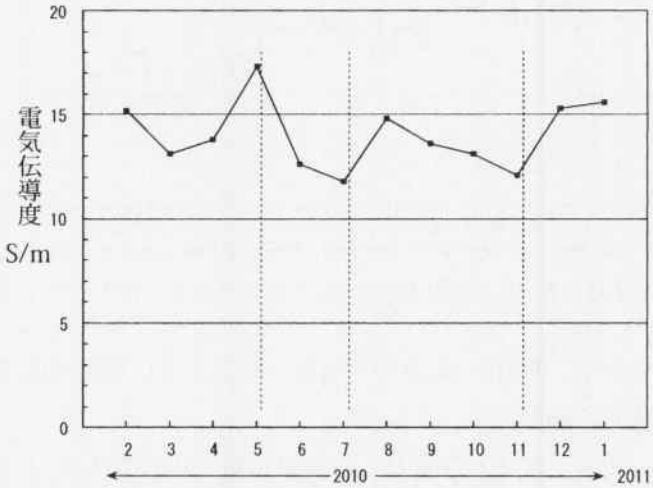


図 17　柳川、多留姫の電気伝導度の変化

まず、柳川、美濃戸では図 16 のように 11.7 ～ 14.6S/m の間でその差は 2.9S/m 値で推移しており季節的な変動は比較的少ない。

図 17 の柳川、多留姫神社では田畑に出入りする水のせいか 5 月が一番大きい値を示し、田の水を落

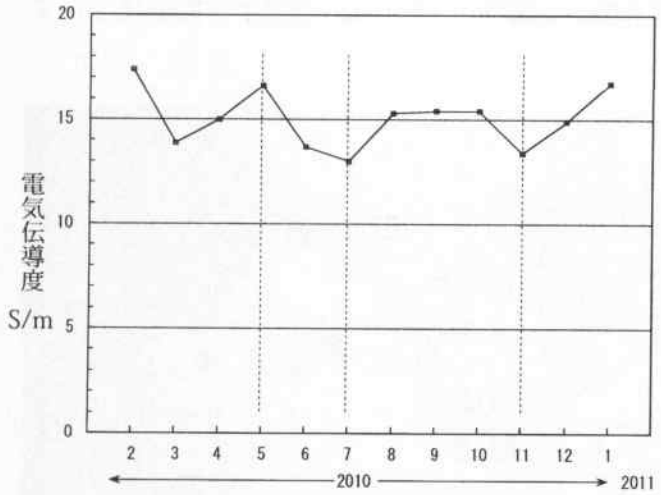


図 18　柳川、下古田の電気伝導度の変化

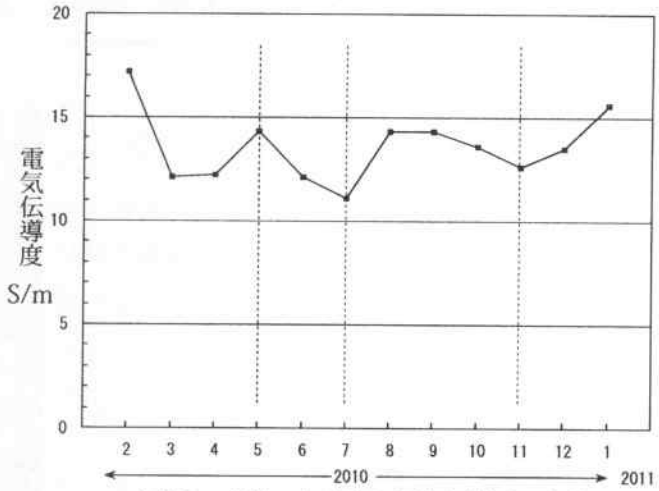


図 19　上川、本町東の電気伝導度の変化

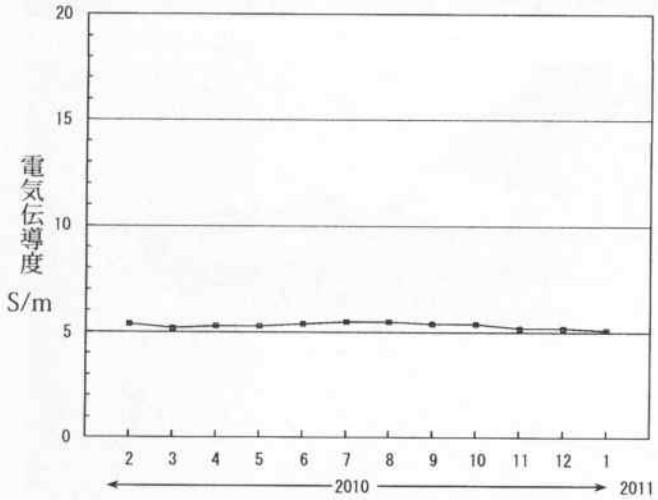


図 20　博物館水道水の電気伝導度の変化

としてしまう７月と、田に全く水のない11月が最も小さい値を示すようになる。12.1～17.3S/mの間でその差は5.2S/mであり大きな差になっている。

図18の柳川、下古田では13.4～17.4S/mの間で、その差は4.0S/mとなっている。多留姫神社と同じように5月が大きな値を示し、7月11月は低くなる。

図19の上川、本町東（御座石神社東）でも同じような傾向は続き5月は比較的大きな値を示し、7月11月には低くなる。電気伝導度は11.1～17.2S/mの間でその差は6.1S/mで観測定点中で最も大きい差を示した。

博物館水道水の電気伝導度の変化は図20に示した。年間の変動は5.1～5.5S/mの間でわずかに0.4S/mの差であった。また5S/mという値自体低い数値で、混入イオンの少ないすばらしい水であることを物語っている。良好な水が安定して茅野市民に供給されていることになる。

以上、2005年11月から2011年1月までの5年間にわたる柳川上流から下流までの3地点、上川本町東（御座石神社東）、博物館水道水の気温・水温・PH・電気伝導度（2010年2月～2011年1月）の変化について観測結果を掲載しました。その間これらの値に大きな変化はみられませんでした。生活の一番の基盤である水が安定した値であることはなによりありがたいことです。

茅　野　靖　夫

Ⅱ　シノビアミメカワゲラの羽化期、産卵日、産卵数、卵期間、孵化率、成虫生存期間について

茅野　靖夫

(1) はじめに

アミメカワゲラ科のシノビアミメカワゲラ Megaperlodes niger は、1990 年日本陸水学会山形大会で、山形大学理学部横山宣雄教授等によって「この大型のアミメカワゲラが今まで発見されなかったのは、世を忍んで生きてきたに違いない。そこで、忍び＝シノビアミメカワゲラと命名したい」として発表された。

本種の既知生息域では個体数は極めて少なく、長野県では 1998 年 4 月小県郡長門町依田川支流大門川本沢で幼虫 3 頭が著者によって初めて発見された。その後 2004 年 9 月同大門川大門沢で幼虫 1 頭、続いて同年 11 月諏訪郡原村弓振川上里大橋で幼虫 5 頭が、いずれも著者によって発見された。現在のところ県内ではこの 3 箇所のみである。個体数が少ないため本種についての生態的知見は極めて少なく、しかも清流のみに生息している種なので現在の生息地の水質悪化に伴う消滅が心配される。幸い弓振川上里大橋には比較的生息数が多い。これをつかって、シノビアミメカワゲラの羽化期、交尾期、産卵日、産卵数、孵化率、成虫生存期間等について調べた。

図 1　シノビアミメカワゲラの生息する諏訪郡原村弓振川

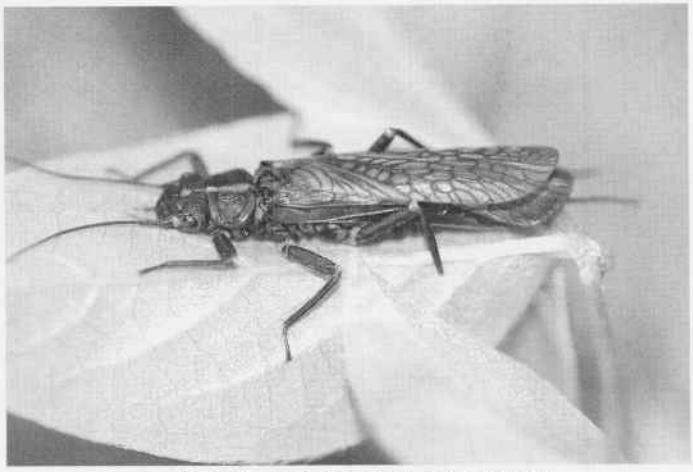


図 2 シノビアミメカワゲラの成虫

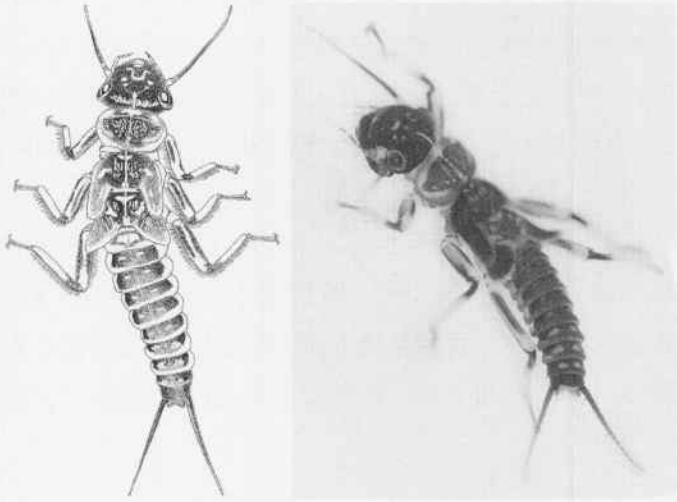


図 3　シノビアミメカワゲラの幼虫 (茅野原図)

(2) 研究の方法

シノビアミメカワゲラ成虫の採集と卵飼育

本種の個体数は極めて少ないので、直接成虫を得ることは非常に難しい。そこで本種の終齢幼虫を弓振川で採集してきて、自宅横の湧水と自宅から 2km 離れた非常に清れつな水の流れる諏訪郡富士見町釜無川支流武智川神戸堰で飼育し成虫を得る。

まず、採集してきた幼虫は直径約 12cm 長さ

表 1　幼虫採集記録（長野県諏訪郡原村弓振川上里大橋）

年月日	個体数	備考
'05. 3. 26	6頭	水温 5. 0℃
'05. 4. 15	6頭	水温 11. 5℃, 伝導度 57. 1 μ S/cm
'05. 5. 2	14頭	水温 10. 0℃, 伝導度 62. 2 μ S/cm

約30cmの針金で作った円筒形状の筒に女性用のストッキングを被せ、その中に幼虫の棲んでいる川で取ってきた砂利・落葉を入れて水中に浸し飼育する。

成虫が羽化してきたら♂♀一頭ずつ、もしくは♂1頭♀2頭ずつ、幅17cm長さ23cm高さ15cmの透明プラスチック容器の中へ移し、シャーレに水を張ったものと、管瓶のキャップに蜂蜜を入れた容器をおいて飼育、交尾・産卵させる。これによって成虫の生存期間、羽化から産卵時までの期間、産卵数、産卵回数等が把握できる。

次に卵を温度を変えたインキュベーターに移し、孵化数、孵化率を測定する。

(3) 環境要因

①シノビアミメカワゲラ幼虫の生息する弓振川上里大橋の気温・水温は図4に示した。水温は2009年1月16日の0.1℃が最低で、最高は2010年8月15日の17.9℃であった。水温の年間較差は17～18℃である。

②同じく同地点のpHは図5に示した。ほぼ中性の7.0前後である。

③また、同地点の電気伝導度は図6に示した。6.8～11.8 S/m(ジーメンスパーメートル)ときわめて低い値で

表2　羽化の記録

年月日	♂(頭)	♀(頭)	飼育していた場所	備考
'05.5.1	1	0	神戸堰	逃がしてしまった
'05.5.3	1	2	〃	
'05.5.5	1	0	自宅湧水	弱っている
'05.5.9	1	2	神戸堰	
'05.5.10	1	0	〃	
'05.5.13	0	1	〃	
'05.5.15	1	0	〃	
'05.5.16	0	1	〃	
'05.5.19	0	1	〃	
'05.5.26	0	1	〃	
'05.6.3	0	1	〃	
'05.6.12	0	1	〃	

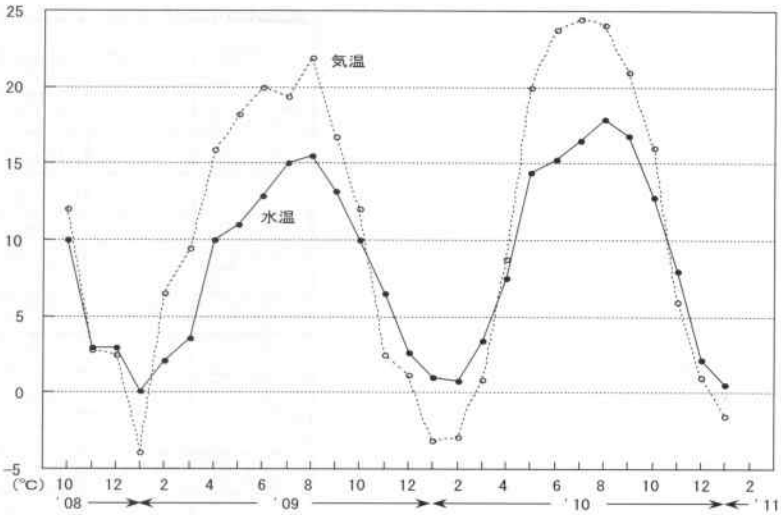


図4　弓振川上里大橋の気温・水温　(2009年10月～20011年1月)

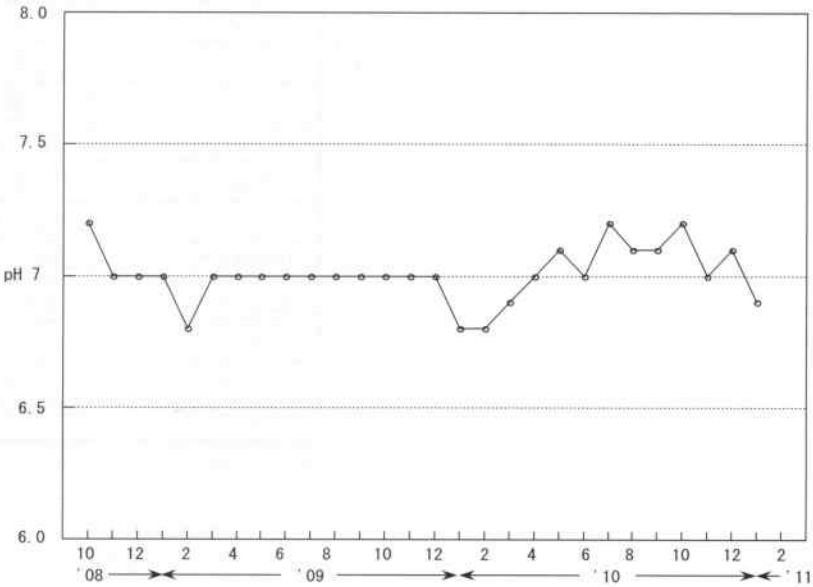


図5　弓振川上里大橋のpH　(2009年10月～20011年1月)

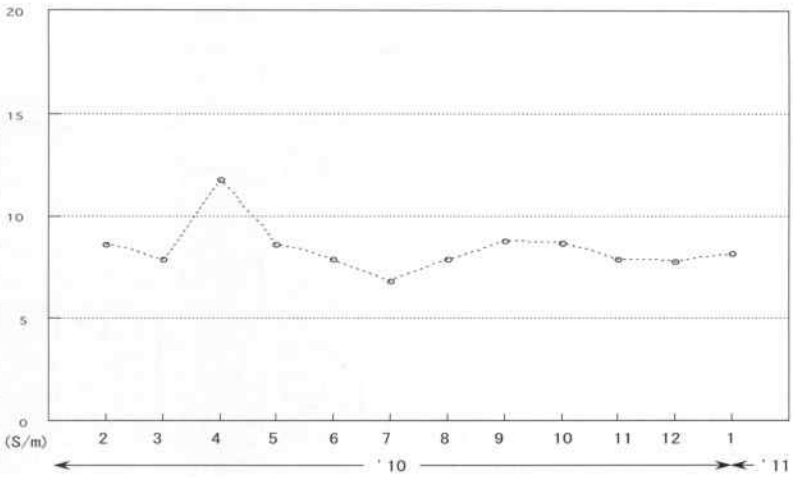


図6　弓振川上里大橋の電気伝導度　(2010年2月～20011年1月)

あった。

(4) 幼虫飼育の結果

①幼虫採集月日と個体数、水温、伝導度などの環境要因は表1のようであった。

②羽化の記録

幼虫を飼育した結果表2のように成虫が得られた。5月1日は、夜に飼育槽を開けたので逃げられてしまった。また自宅横の湧水で飼育していた幼虫は弱っていてその後死んでしまった。残りは死んでしまった。

③各個体の産卵回数と産卵数

産卵は表3のように早い個体は5月23日に始まり、遅いものでは6月22日まで続いた。産卵数は初回が一番多く、回数を重ねるごとに少なくなっていく。産卵回数は5回に及ぶものもあったが、5回目はほんのわずかであった。そのようすは図7に示した。

④羽化から産卵までの日数

羽化してから産卵するまでの日数は、表3右端列のように、短いもので11日、長いもので23日、平均は17日であった。ヒメカワゲラ属 Stavsolus sp.（河西康雄1996…ヤマトアミメカワゲラモドキStavsolus japonicus）の20日を超えるのに比べれば短いが、オオヤマカワゲラ（茅野・松井1974）やミスジ

表3　産卵日と産卵数

年月日	卵塊数	卵の記号（卵数）	卵数	羽化から産卵までの日数
'05.5.23	1	5/3羽化a♀　M523A	633	20日
'05.5.26	3	5/3羽化b♀　M526B	513	23日
		5/9羽化a♀　M526C	872	17日
		5/9羽化b♀　M526D	446	17日
'05.5.28	1	5/3羽化a♀(2回目)　M528E	(736)	
'05.5.30	1	5/3羽化b♀(2回目)　M530F	(353)	
'05.5.31	1	5/13羽化♀　M531G	430	17日
'05.6.1	2	5/16羽化♀　M601H	750	16日
		5/19羽化♀　M601I	1249	13日
'05.6.2	1	5/26羽化♀　M602J	928	11日
'05.6.3	1	5/13羽化♀(2回目)　M603K	(562)	平均　17日
'05.6.4	2	5/9羽化a♀(2回目)　M604L	(385)	
		5/16羽化♀(2回目)　M604N	(340)	
'05.6.5	1	5/26羽化♀(2回目)　M605O	(413)	
'05.6.6	1	5/19羽化♀(2回目)　M606P	(354)	
'05.6.7	1	5/9羽化a♀(3回目)　M604Q	((28))	
'05.6.8	2	5/13羽化♀(3回目)　M608R	((13))	
		5/26羽化♀(3回目)　M608S	((29))	
'05.6.9	1	5/19羽化♀(3回目)　M609T	((16))	
'05.6.10	1	5/13羽化♀(4回目)　M610U	(((9)))	
'05.6.11	1	5/3羽化b♀(3回目)　M526B	((65))	
'05.6.12	1	5/26羽化♀(4回目)　M612OV	(((12)))	
'05.6.13	1	5/3羽化a♀(3回目)　M613X	((38))	
'05.6.15	2	5/13羽化♀(5回目)　M615Y	((((6))))	
'05.6.22	1	5/26羽化♀(5回目)　M622AB	((((4))))	

括弧無しは1回目、()は2回目、(())は3回目、((()))は4回目、(((())))は5回目

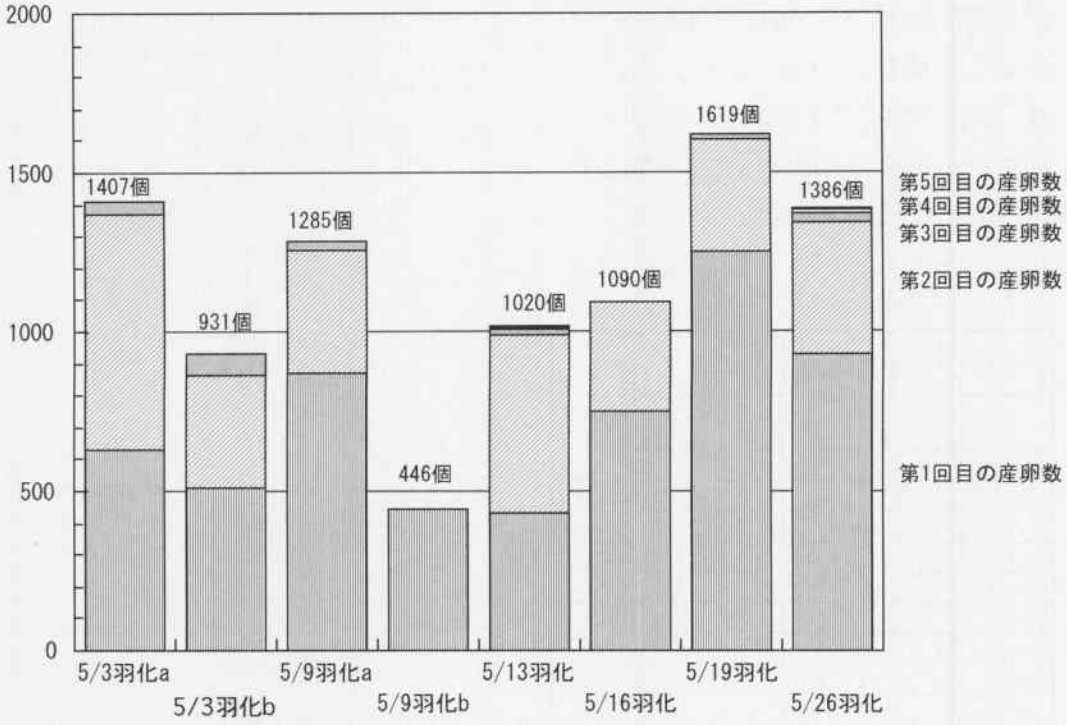


図7　雌の個体別産卵回数と産卵総数

表4　卵の大きさ

	高さ	幅
1	0.69	0.47
2	0.67	0.44
3	0.67	0.43
4	0.67	0.44
5	0.63	0.46

	高さ	幅
6	0.66	0.47
7	0.69	0.46
8	0.67	0.40
9	0.67	0.48
10	0.66	0.47
平均	0.668	0.452

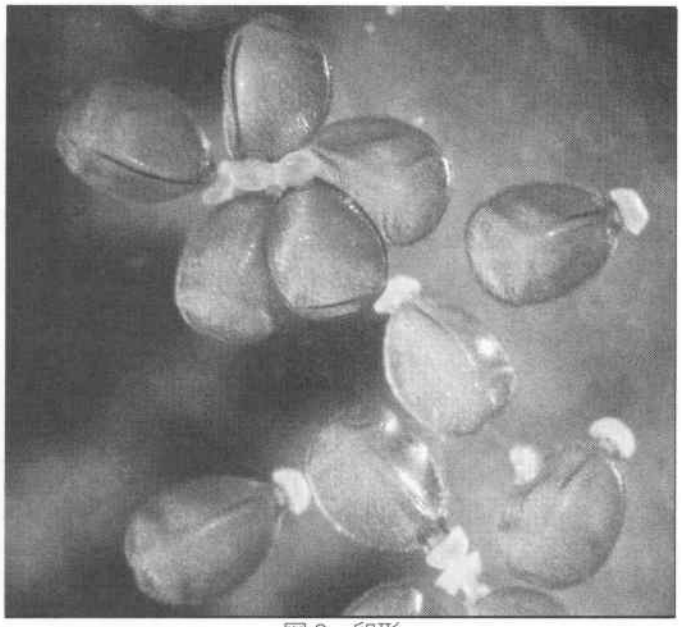


図8　卵形

アミメカワゲラ（茅野未発表）に比べれば長い。すなわちオオヤマカワゲラやミスジアミメカワゲラが幼虫の終齢期にすでに十分成長した卵を持ち、雄が先に羽化してきて雌の羽化を待ち、雌が羽化してくるやいなやすぐに交尾し、産卵するのにくらべれば長い。

⑤卵の大きさ

卵形は図8のように角の滑らかな変形逆三角柱のような形である。

卵の大きさは表4に示した。平均で高さが0.668mm幅が0.452mmである。ほぼオオヤマカワゲラの卵（茅野、松井 1974）と同じくらいである。

⑥卵の孵化率

水槽の恒温期の設定温度を11℃から23℃まで3℃ずつ変えて5槽設定し、4卵塊について飼育した。

表5　卵塊別、水温別の孵化数と孵化率（2005年）

羽化日	記号	産卵日	産卵数	設定温度 11℃ 孵化数/飼育数	孵化率%	設定温度 14℃ 孵化数/飼育数	孵化率%	設定温度 17℃ 孵化数/飼育数	孵化率%	設定温度 20℃ 孵化数/飼育数	孵化率%	設定温度 23℃ 孵化数/飼育数	孵化率%
5.13	M531G	5.31	430	0/82	0.0	0 / 80	0.0	0 / 78	0.0	7/80	8.9	0/79	0.0
5.16	M601H	6.1	750	0/130	0.0	1 / 128	0.0	120 /132	90.9	107/135	79.3	78/130	60.0
5.19	M601 I	6.1	1249	2/189	1.1	2 / 190	1.1	85 / 187	45.5	83/166	50.0	6/186	3.2
5.26	M 602 J	6.5	928	1/152	0.0	0 / 156	0.0	1 /156	0.0	1/118	0.8	0/145	0.0

結果は表5のようであった。卵塊によって孵化率が大きく異なっている。

まず、5月13日羽化M531Gは5月31日に産卵した。しかし、11℃～17℃及び23℃では孵化してこなかった。20℃では80個中7個だけが孵化してきた。孵化率は非常に低かった。

次に5月16日羽化のM601Hの卵塊は11℃・14℃では孵化してこなかったが17℃で90.9%、20℃では79.3%、23℃では60.0%が孵化してきて、今回の実験では一番の高い高孵化率を示した。

次に、5月19日羽化M601Iは6月1日に産卵した。その飼育結果は、11℃ 14℃で1.1%であったが、17℃で45.5%、20℃で50.0%とかなり高い値を示したが、23℃では3.2%であった。

5月26日羽化のM602Jは6月5日に産卵した。しかし、20℃で1個孵化してきたのみで、他の恒温水槽では孵化してこなかった。

これらの結果からみると本種にとって卵発生の適温は17℃から20℃くらいのようである。

⑦成虫の生存日数

成虫が羽化してきた後、どのくらいの期間生存しているかを調べた結果が図9である。

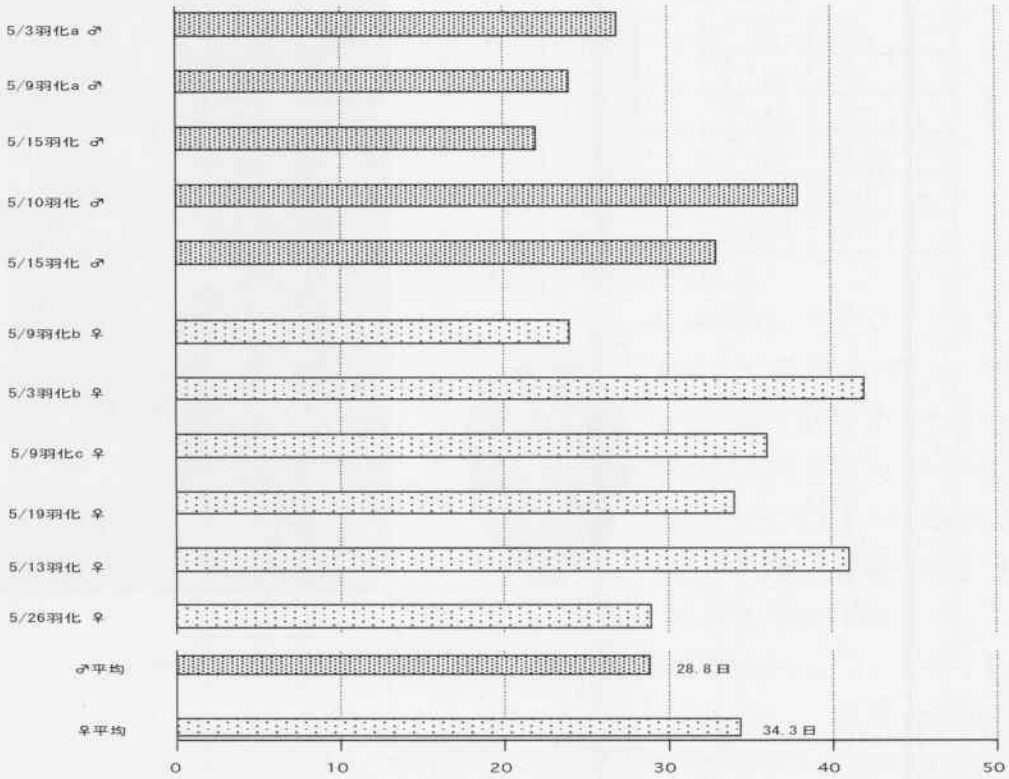


図9　成虫雌雄の生存日数（2005年）

これによると、雄では最も短命だったのは、5月15日に羽化してきた個体で6月7日に死んだ。生存期間は22日であった。最も長命な雄は5月10日羽化6月15日死亡の38日だった。雌の短命は、5月9日羽化6月3日死亡の24日であった。一番長命は5月3日羽化6月14日死亡の42日であった。雄の平均生存日数は28.8日、雌は34.3日で雌の方が5.5日長生きしたことになる。

文　献

茅野靖夫・松井ゆう（1974）オオヤマカワゲラの成虫、卵および1・2・3齢幼虫について、昆虫と自然 vol.9　no.7

横山宣雄・磯辺ゆう・山本茂（1990）アミメカワゲラ科の新属新種シノビアミメカワゲラ（Megaperlodes niger）の山形県における分布、第55回日本陸水学会要旨集

河西康雄（1996）ヤマトアミメカワゲラモドキ Stavsolus japonicus (0kamoto) の生活史と成長に伴う移動について（予報）、兵庫陸水生物、47

Yasuo Chino（1999）A new Species of the Genus Skwala Ricker from Central Japan (Nagano Pref.) (Plecoptera: Perlodidae), Aquatic Insects, Vol. 21, No. 3

Ⅲ「茅野ミヤマシロチョウの会」によるミヤマシロチョウの保護・保全活動について

福田　勝男・宮下　りよ（茅野ミヤマシロチョウの会）

1　はじめに

「茅野ミヤマシロチョウの会」でミヤマシロチョウ Aporia hippia japonica の保護・保全活動を開始から３年が経過した。2010 年度の「茅野ミヤマシロチョウの会」による保護・保全活動の状況について、その活動経過を報告する。

＊これまでの活動経過については茅野市八ヶ岳総合博物館紀要第１７号、第１８号参照。

2　2010 年度の活動概要

２月２８日　茅野ミヤマシロチョウの会第３回総会

３月　６日～２０日　博物館活動発表展出展

１３日　こども自然探検隊（＊以下、「探検隊」と表記）「竹トンボづくり」

４月　９日　静岡大学教育学部付属浜松中学校　しなの体験学習受け入れ

１８日　学習会（自然環境・自然観察インタープリターについて）

２９日～５月３０日　八ヶ岳総合博物館共催「花と蝶写真展」第１部

５月１５日　観察会（ヒメギフチョウと越冬巣）

１６日　探検隊（山菜採りと食事）

２２日　探検隊（田植えをしよう）

２９日　保全活動　２０１０保全地　整備作業

６月　５日　観察会（ホテイランと越冬巣）
探検隊（虫追いとサツマイモの苗植え付け）

８日～７月４日　八ヶ岳総合博物館共催「花と蝶」写真展　第２部

１０日　長野県の希少野生動植物保護回復事業に認定される（保護回復事業の認定は県内７例目、ミヤマシロチョウでは初）

１９日　研修会（湯の丸高原）

２５日～８月８日　保護監視活動

２７日　観察会（初夏のチョウと花）

２９日　調査（越冬巣の再調査）

７月　３日　越冬巣調査

１７日　探検隊（ミヤマシロチョウ観察会）

１８日　一般観察会（ミヤマシロチョウ）

２９日　LCV「３年目の茅野ミヤマシロチョウの会」放映

８月２０日　会報第５号発行

２１日　観察会（秋のチョウと花）

５月 22 日　こども自然探検隊
はじめての田植え

８月 22 日　こども自然探検隊
オニヤンマ捕ったよ

２２日　探検隊（アサギマダラと秋の花）
２８日　長野日報特集「茅野ミヤマシロチョウ」新聞１ｐ掲載
９月　６日～７日　保護活動　観察路立ち入り禁止柵設置作業
１２日　保全活動　整備作業
２３日　長野県諏訪教育分科会諏訪支部（「地域と環境教育」会場）にて発表
２６日　探検隊（キノコ採りとキノコ汁）


吸水するミヤマシロチョウ

１０月　２日　探検隊（稲刈り）
３日　調査・保全　２０１１予定地植生調査と２０１０保全地整備作業残分
１０日　調査　２０１１予定地　植生調査
１０月２４日　探検隊（サツマイモ堀りと焼き芋）
１１月　３日　調査　越冬巣調査／２０１１予定地植生調査
２０日　探検隊（餅つき）
２５日　日本チョウ類保全協会との越冬巣合同調査（富士見地区の生息確認調査も）
１２月１１日　探検隊（ネイチャークラフト）
１８日　長野県生物多様性地域懇談会／２０１０年度活動反省会
１月１１日～１月３１日　ちの本町郵便局　写真展示
２月　１日～２月２５日　玉川郵便局　写真展示
５日　探検隊「雪遊びとリスの観察」
２月２７日　茅野ミヤマシロチョウの会第４回総会
３月　５日　探検隊（冬鳥観察会）
５日～２７日　博物館活動発表展参加
６日　「ミヤマシロチョウ研究会」参加

３　パトロールと観察

６月２５日～８月８日にかけて阿弥陀岳南稜及び美濃戸の２か所で実施した保護監視活動（パトロール）には会員延べ１３８人が参加した。監視活動中、ミヤマシロチョウの捕獲を目的として立ち入ったと思われる来訪者は２６人と昨年０人に対して大幅に増加した。活動中に確認した成虫数は表の通りである。

２０１０年度は、阿弥陀岳南稜の保全地において哺乳類ではカモシカ２頭、ニホンジカ、テンの姿が初めて確認された。ニホンジカについては初めて食害も確認され、昨年度よりも生息数が増加している可能性がある。昨年、姿が確認されたツキノワグマについては熊棚等が確認された。チョウ類ではベニヒカゲが初めて確認されたほか、昨年度に引き続きオオイチモンジほか昨年度よりも多い４７種が確認された。植物では林道においてホテイラン２株が初めて確認された。

これまでの当会による懸命な保護・保全活動にも関わらず、阿弥陀岳南稜の保全地において２００９年７月に最大で２６頭確認できていた成虫は２０１０年７月に最大で１８頭、２００９年に４５個確認されていた越冬巣は、２０１０年に１８個と減少した。尾根を一つ越えた原村の生息地に

おいては、越冬巣、成虫とも大幅な増加が見られたことから、この原因の一つとして八ヶ岳山麓の一部地域で２０１０年2月１１日に確認された「雨氷」の影響が考えられる。「雨氷」は気温が氷点下であるにもかかわらず、雨が降っているような場合に起こる気象現象である。雨氷の影響調査のため２０１０年7月に行った越冬巣の再調査においては、調査した４２個の越冬巣のうち、死滅が１２個、脱落が２６個、盗難が１個、生存が３個と阿弥陀岳南稜保全地のミヤマシロチョウにとって厳しい生息環境にあったことが推測される。

4　今年度の成果

活動を開始して３年を経過した。今年度の主な成果としては、長野県のミヤマシロチョウ保護回復事業計画における当会の事業の認定、植生保護のための「立ち入り禁止柵」の設置、保全活動による整備 3,700㎡が挙げられる。

長野県では、希少野生動植物保護条例に基づく指定希少野生動植物（７２種）のうち、県民主体の保護活動が期待される種及び特に緊急に保護が必要な種について保護回復事業計画を策定しており、ミヤマシロチョウの保護回復事業計画が２０１０年３月に策定された。２０１０年６月には当会の保護回復事業も県の事業認定を受けた。


5月15日　観察会　越冬巣を確認

阿弥陀岳南稜の保全地においては、ミヤマシロチョウ撮影のための立ち入り等により踏み荒らしが増加してきていたことから、(財) 自然公園財団の自然保護ボランティアファンドの助成を受けて、９月に「立ち入り禁止柵」を設置した。これにより、踏み荒らしを一定程度制限でき、周辺の生態系全体の保護に役立つものと期待される。

ミヤマシロチョウの生息環境を整えるための保全活動について、３年目となった阿弥陀岳南稜では 2,500㎡（2008 年度からの合計 8,700㎡）、今年度から保全活動を開始した美濃戸で 1,200㎡の保全活動（托伐と幼虫の食樹であるヒロハヘビノボラズの剪定）を実施した。いずれの保全地も５年計画で全区域の保全活動を手掛ける予定である。

5　来年度に向けての課題

今年度は終齢巣の盗難が１つ確認されたほか、捕獲を目的とした来訪者２６人と昨年度より大幅に増加したことから来年度は保護監視体制をさらに強化したい。来年度の保全活動は阿弥陀岳南稜で２，０００㎡、美濃戸で１，２００㎡を予定している。

また、アザミ等の開花時期が成虫飛翔期よりも遅く吸蜜植物が不足している状況であるため、吸蜜植物の育成を行っていく予定である。長期的には、生物多様性を保持しつつ、ミヤマシロチョウが安定的に生息できる環境づくりを目指し、モニタリングも拡充していきたい。

6　謝辞

「茅野ミヤマシロチョウの会」の活動を熱心に支えてくださっている会員、会の活動を支援してくださっている企業、長野県自然保護課、長野県環境保全研究所、信州大学、日本チョウ類保全協会の関係者の皆様ほか、当会を支えてくださっているすべての皆様に厚く御礼申し上げたい。

2010年度　保護監視活動結果

月日	曜日	天候	成虫確認数（最大数）		備　考
			阿弥陀岳南稜	美濃戸	
6/25	金	晴	0		
6/27	日	雨のち曇	0		
6/29	火	曇一時晴	0		
7/1	木	晴のち曇	0		
7/3	土	曇			
7/5	月	晴	0		
7/7	水	曇時々薄日	0		
7/9	金	曇	1		
7/10	土	晴時々曇	4	0	
7/11	日	曇のち雨	0		
7/12	月				雨のため中止
7/13	火				雨のため中止
7/14	水				雨のため中止
7/15	木	雨のち曇	0		
7/16	金	曇		0	阿弥陀岳南稜は増水のため中止
7/17	土	晴	11		
7/18	日	晴	15		
7/19	月	晴	14		
7/20	火	晴	18		
7/21	水	晴	14		
7/22	木	晴時々曇	11		
7/23	金	晴	6	3	
7/24	土	晴	7		
7/25	日	晴	3		
7/26	月	晴	4	0	
7/27	火	晴	7		
7/28	水	晴のち曇	5	0	
7/29	木				雨のため中止
7/30	金	曇のち晴	1		
7/31	土	晴時々曇	0		
8/1	日	晴一時曇	2		
8/2	月	曇小雨	0		
8/3	火	曇のち晴	3		
8/4	水	晴のち曇	2		
8/5	木	晴時々曇	3		
8/6	金	曇のち雨	1		
8/8	日	曇一時晴	2		

平成22年度茅野市八ヶ岳総合博物館・八ヶ嶽岳麓文芸館事業報告

1　入館者数（平成22年4月1日～平成23年3月31日）　11,649名

平成21年度　15,009名　（前年対比3,360名減）

減の要因：個人については、昨年の企画展「諏訪鉄山」と関連する見学会等が多かったことによる反動。団体については、梅雨明けが早かったため雨対策予定校の中止。

2　八ヶ岳総合博物館企画展

(1) 写真展『花と蝶「春」』

4月29日（木）～5月30日（日）　期間中の入館者1,334名

(2) 写真展『花と蝶「夏」』

6月8日（火）～7月4日（日）　期間中の入館者1,880名

諏訪地方を中心として、低山帯から高山帯に分布する植物（花）と蝶を取り上げました。植物は植物研究家今井建樹先生より当館にご寄贈いただいた、約１０万点のスライドの中から、春と初夏に花咲く写真を選びました。絶滅が危惧されている希少植物から、身近でなじみの深い植物の花までを紹介しました。

また蝶は、茅野ミヤマシロチョウの会の特別な計らいにより、会員の皆さんが撮影した写真の中から「早春～初夏の蝶たち」と「盛夏～秋の蝶たち」を二期に分けて展示しました。吸蜜や静止状態など、あでやかな蝶たちがいろどり鮮やかに写されています。

写真展『花と蝶「春・夏」』

(3) 企画展「茅野市の古代～縄文時代と現代を繋ぐもの～」

7月17日（土）～10月11日（月）　期間中の入館者3,200名

茅野市は古くから尖石遺跡をはじめとする縄文時代遺跡の多いところとして知られたところです。平成に入ってから八ヶ岳山麓で行われたほ場整備事業により、［仮面の女神］が出土した中ッ原遺跡などさらに多くの遺跡が多数発掘調査され、縄文大国と呼ばれるにふさわしいすばらしい資料が私たちに提供されました。

一方、それに続く古代の遺跡についてみると、現在の市街地と遺跡が重なっているためか、大規模な発掘調査が行われることはほとんどありませんでした。しかし、近年の区画整理事業や個人住宅の建設などで、家下遺跡や構井・阿弥陀堂遺跡、上原城下町遺跡などが調査され、徐々にその様子が明らかになりつつあります。

今回の企画展では、そうした茅野市の古代にスポットを当て、縄文時代から現代まで連綿と続いてきた私たちの祖先の生活を紹介しました。

(4) ロビー写真展『御柱』

市民により撮影されたデジタルデーターを選考し、ロビーに展示。

4月15日(木)～10月17日(日)　　期間中の入館者 6,886 名

(5) 研究・創意工夫展

市内小中学生の研究・絵画・工作の優秀作品の展示。

企画展『茅野市の古代～縄文時代と現代を繋ぐもの～』展示風景

ロビー写真展『御柱』

研究・創意工夫展表彰式

『活動発表展』展示風景

10月23日(土)～11月21日(日)　　期間中の入館者　1,734名

(6) 博物館活動発表展

博物館の講座の作品や記録の他、博物館で活動している各ボランティア団体の作品や記録などを展示発表。また最終日の27日(日)はイベントデーとして博物館を無料開放。

3月5日(土)～3月27日(日)　　期間中の入館者

3　ふるさと講座

(1)	探鳥会　青少年自然の森～竜神池周辺	4月29日(木・祝)
	講師：野澤進之輔先生(青少年自然の森)	参加者大人15+小中2名
(2)	赤彦文学散歩　5月22日（木）	
	講師：伊藤俊彦（岳録文芸館職員）	参加者3名
(3)	八ヶ岳自然観察会　天狗岳	7月10日(土)
	講師：白鳥保美先生(宮川小学校)	参加者大人15+小中2名
(4)	坂本養川の堰を訪ねて～大河原堰～	7月31日(木)
	講師：茅野靖夫(博物館長)	参加者17名
(5)	天文講演会　川崎市八ヶ岳少年自然の家(富士見町)	2月5日(土)
	講師：若宮崇令先生	参加者35名

探鳥会　青少年自然の森～竜神池

赤彦文学散歩　柿蔭山房

八ヶ岳自然観察会　東天狗岳山頂

坂本養川の堰を訪ねて　滝ノ湯川取入れ口

4　夏休み楽しい工作

(1) ペットボトル風力発電機　8月6日（金）指導：山田善興先生　参加者　22名

(2) ペットボトルロケット　8月8日（日）指導：小池春夫先生　参加者　16名

(3) ネイチャークラフト　8月9日（月）指導：福田勝男先生　参加者　30名

(4) ウッドアクセサリー　8月10日（火）指導：西原壽之先生　参加者　38名

(5) 機織り体験ランチョンマット　8月11日（水）指導：機織りボランティア　参加者　8名

(6) 機織り体験ランチョンマット　8月12日（木）指導：機織りボランティア　参加者　10名

5　ロビー体験

(1) 伝統味噌つくり　4月23日（火）　参加者　20名

(2) 布ぞうり　5月23日（日）　講師：平沢　治先生　参加者　大人15＋小中2名

(3) 草木染め　5月25日（火）　講師：大久保久子、松影和代先生　参加者　20名

(4) 竹細工～花かご作り～　6月20日(日)　講師：竹松安治先生　参加者　18名

(5) 竹細工～キノコ採りびく～　9月25日(土)　講師：竹松安治先生　参加者　20名

(6) 花炭　11月20日(土)　講師：岡野勇二先生　参加者　13名

(7) しめ飾り　12月4日(土)　講師：平沢　治先生　参加者　25名

(8) 凍み豆腐　1月22・23日(土・日)　講師：仙石喜一先生ご夫婦　参加者　29名

(9) ひな人形　1月29日（土）　講師：大久保久子先生　参加者　15名

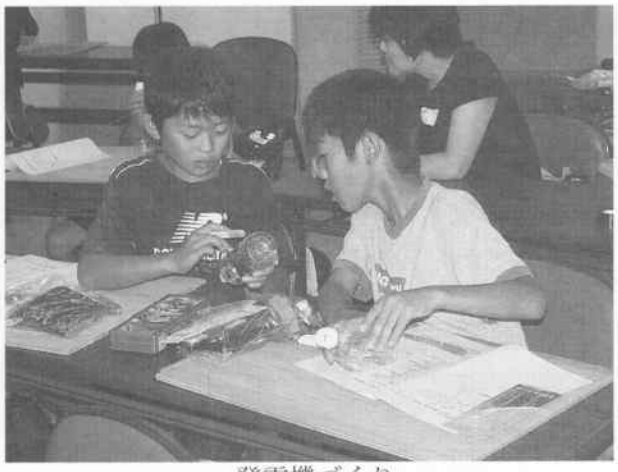
(10) 植物や昆虫を点描で描いてみよう　2月19・20日(土・日)　講師：茅野靖夫　参加者　13名

(11) 伝統味噌づくり　3月20日(日)　講師：平尾静代、長田ひろ子　参加者　23名

6　館・学連携事業

(1) 諏訪東京理科大学フレッシュマンゼミナール

4月22日（木）	解説：茅野靖夫、小林深志	46名
5月13日（木）	解説：茅野靖夫	19名
5月18日（火）	解説：茅野靖夫	25名
6月　1日（火）	解説：小林深志	14名
6月10日（木）	解説：小林深志	17名
6月15日（火）	解説：茅野靖夫	14名


発電機づくり


ペットボトルロケット


ネイチャークラフト


木のアクセサリー


びく作り


花炭


ひな人形作り


点描画講座

7月14日（水）　指導：平尾静代　4名

(2) 茅野高校総合学習

10月6日（水）　指導：中村くすみ先生、茅野靖夫　7名

7　博物館活用指定学級または博物館利用学級　参加者延べ　1,745名

(1) 静岡大学附属浜松中　4月9日（金）

「しなの体験学習」　指導 両角源美、福田勝男　6名

(2) 下諏訪南小学校　5月7日（金）

「養川コーナー、昔の暮らし」　113名

(3) 豊島区立川村小学校　5月20日（木）

「社会科体験学習→養川コーナー」　112名

(4) 二葉高校天文部　6月10日（木）　「天体観測」　10名

(5) 永明中学校　6月16日（水）　「体験学習」　135名

(6) 永明小学校　6月16・17日（水・木）

「体験学習」　2名

(7) 富士見中学校　7月2日（金）

「山のなりたち、岩石、水の学習」　48名

(8) 久米川東小学校　7月13日（火）

「機織り、ブーメラン製作」　10名

(9) 江東区砂町小学校　7月13日（火）　「体験学習」　149名

(10) 川口北高校　7月15日（木）　「体験学習」　85名

(11) 豊平小学校　7月22日（木）

「坂本養川と大河原堰」案内・解説 茅野靖夫　42名

(12) 和光鶴川小学校　7月22日（木）　「社会見学」　77名

(13) 都市大学附属中学校　7月24日（土）　「課外授業の一環」　77名

(14) 松本養護学校　7月28日（水）　「社会見学」　23名

(15) 逗子開成中学校　7月29日（木）

「林間学校行事の一環として」　313名

(16) 永明小学校　8月26日（木）

「坂本養川と大河原堰」案内・解説 茅野靖夫　37名

(17) 永明小学校　8月27日（金）

「坂本養川と大河原堰」案内・解説 茅野靖夫　36名

(18) 永明小学校　9月2日（木）

「坂本養川と大河原堰」案内・解説 五味一郎　37名

(19) 上の原小学校　10月1日（金）

「坂本養川と大河原堰」案内・解説 五味一郎　45名

(20) 城南小学校　10月8日（金）

「坂本養川と大河原堰」案内・解説 茅野靖夫　96名

(21) 四賀小学校　10月8日（金）

「坂本養川と大河原堰」案内・解説 五味一郎　60名

(22) 富士見中学校　10月22日（金）

「川の学習、採集調査」　28名

(23) 湖東小学校　11月5日（金）

「坂本養川と大河原堰」案内・解説 五味一郎　37名

(24) 宮川小学校　11月17日（水）

「坂本養川と大河原堰」案内・解説 茅野靖夫　57名

(25) 宮川小学校　11月18日（木）

「坂本養川と大河原堰」案内・解説 五味一郎　58名

(26) 北山小学校　11月19日（金）

「坂本養川と大河原堰」案内・解説 茅野靖夫　28名

(27) 湖東小学校　1月19日（水）

「ところてん作り」指導：平尾静代　他館職員3名　52名

(28) 玉川小 (3年)　2月8日 (火)

「昔の道具、大河原堰予習」解説：茅野靖夫 , 小林深志　65名

(29) 玉川小 (3年)　2月10日（火）

「昔の道具、大河原堰予習」解説：茅野靖夫　27名

(30) 玉川小 (4年)　2月22日（火）

「坂本養川と大河原堰」解説：茅野靖夫、小林深志　67名

(31) 玉川小 (4年)　2月23日（水）

「坂本養川と大河原堰」解説：茅野靖夫、小林深志　67名

(32) 玉川小 (4年)　2月24日（木）

「坂本養川と大河原堰」解説：五味一郎　32名

湖東小学校ところてん作り

8　子ども科学クラブ

(1) 発足式 講演「私の出会ったカラスの不思議」　4/24(土)
富士見小学校 藤森斉先生　52名

(2)「植物の体のつくり」　5月8日(土)　指導：浜　篤先生　25名

(3)「探鳥会」　5月22日(土)　指導：野沢進之輔先生　33名

(4)「一研究の進め方、水質調査法」
6月13日(日)　指導：浜　篤先生　24名

(5)「陸生昆虫の体のつくりと標本の作り方」
6月26日(土)　指導：茅野靖夫　18名

(6)「水生昆虫で川の水環境を探るⅠ　講義」
7月17日(土)　指導：茅野靖夫　17名

(7)「ミヤマシロチョウ観察会」
7月25日(日)　指導：福田勝男先生　21名

(8)「水生昆虫で川の水環境を探るⅡ　実習」
8月21日(土)　指導：茅野靖夫　28名

(9)「岩石、高層湿原のでき方…事前学習」
8月28日(土)　指導：浜　篤先生　16名

(10)「高層湿原のでき方と霧ヶ峰の植物」
9/11(土)　指導：浜　篤先生　25名

(11)「模型工作…三角ヘリコプター or 模型飛行機作り」
9/26(土)　指導：根橋良紀先生　29名

(12)「化石採集…瑞浪市土岐川河川敷」
10/23(土)　指導：小池春夫、茅野靖夫　41名

(13)「杖突峠から糸静構造線を観察八ヶ岳の成立ちを考る」
11/7(日)　指導：浜篤先生　22名

(14)「地層・岩石・化石のまとめ」
11/14(日)　指導：茅野靖夫　10名

(15)「電気の基礎」　11/27（土）　指導：浜　篤先生　19名

(16)「ソーラーカーの製作」　12/18（土）　指導：根橋良紀先生　18名

(17)「ロボットの基礎…光センサー回路の製作」
1/22(土)　指導：浜　篤先生　14名

(18)「科学マジックで楽しもう」
1/30(日)　指導：茅野靖夫　14名

(19)「宇宙に夢を！系外惑星の話」「星空観望会」
2/5(土)　指導：若宮崇令先生　44名

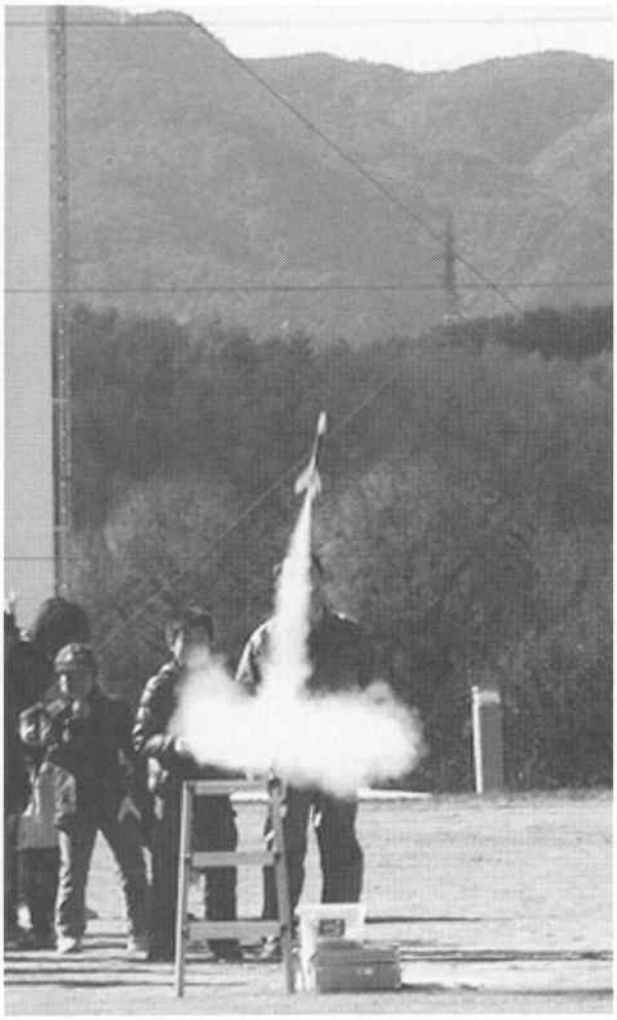
(20)「太陽光電池と LED」　2/12(土)　指導：河村　洋先生　15名

(21)「ネイチャークラフトで昆虫の模型を作ろう」
2/26(土)　指導：福田勝男先生　19名

(22)「冬の野鳥観察会～冬鳥の去る前に～」

模型工作　三角ヘリコプター

化石採集　瑞浪市



ロケットの原理　製作と打ち上げ

ソーラーカーの製作

古文書解読講座

3/5(土)　　指導：野澤進之輔先生　　18名

(23)「ロケットの原理、製作と打ち上げ」、修了式

3/26(土)　　指導：河村洋先生、東裏雅司先生　20名

9 古文書解読事業(神長官守矢史料館と共催)

(1) 古文書相談会　指導：柳川英司先生（文化財係学芸員）

4/16(金)、5/14(金)、6/18(金)、9/17(金)　　参加者　計　6名

(2) 古文書解読講座　指導：柳川英司先生（文化財係学芸員）

1/12(水)…25名、1/14(金)…23名、1/19(水)…24名、1/21(金)…28名、

1/25(火)…19名、1/28(金)…22名、2/1(火)…18名、2/4(金)…23名　　計182名

10 天体観測室の公開事業

(1) 星空観望会　講師：両角英晴さん(ボランティア)北部生涯学習センターで実施

5/14(金)、6/10(木)、9/10(金)、11/12(金)、　　参加者計　30名

11　博物館ボランティア

(1) 山浦の語り部　　登録数 6名

地元のお年寄りから昔体験や地場産業、郷土食などを取材して、話し言葉のまま編集し冊子にするワークショップを行ってもらっている。本年第8集発行。しばらく休刊にするとのこと。

(2)「ねじばな」　　登録数32名

はたおりボランティア。糸整経から織りまでを学びあったり、博物館の体験講座ではたおりを指導したりの活動を行うワークショップ。毎月第2土・日曜日 午前5人午後5人の指導をしてもらっている。

(3)「自然観察友の会」　　登録者数49名　　参加者延べ162名

身近な自然を知るというテーマで、里山を中心に自然観察会を行うワークショップ。

①「姫川源流自然探勝園→親海湿原→木崎湖(居谷里湿原)」　5/13(木)　参加者21名

②「植物観察…長和町・津金寺(ﾂｷﾇｷｿｳ、ﾍﾞﾆﾊﾞﾅﾔﾏｼｬｸﾔｸ)」　6/20(日)　参加者22名

③「ほたる観察会…運動公園」　6/26(土)　参加者9名

④「初夏の山野草観察会…入笠山」　7/11(日)　参加者8名

⑤「伊吹山植物観察会(西の茶屋→山頂→遊歩道→東の茶屋)」　7/22(日)　参加者20名

⑥「美ヶ原高原ハイキング(植物観察会)」　8/5(木)　参加者22名

⑦「初秋の山野草観察会」　9/5(日)　参加者19名

⑧「上高地散策会・大正池→明神池→大正池」　10/13(日)　参加者20名

⑨「戸隠化石博物館→信州新町化石博物館→四賀化石館」　11/7(日)　参加者21名

(4) 文芸ボランティア　　登録数 7名

拓本収集、文学碑探索、学習会など文芸に関する調査・研究を行っている。

(5)「諏訪地方の食文化と伝統行事・昔話を楽しむ会」　　登録数 6名

郷土に伝わる食や伝統行事の掘り起こしや染色技術を習得したりし、気軽に食事をしながら山浦

自然観察友の会　居谷里湿原

自然観察友の会　入笠山

自然観察友の会　美ヶ原

自然観察友の会　上高地

の語り部が収集した昔話を聞く会。一般にも呼びかけ参加してもらっている。

12　茅野市の自然保護・保全活動

○茅野ミヤマシロチョウの会　　会員 100 名

趣旨：絶滅に瀕している県天然記念物、県希少野生動植物特別指定種であるミヤマシロチョウを絶滅から守り、後世に継承するための保護・保全活動を行う。大人だけではなく、子どもたちにも動植物の生態観察・保全活動などの事業への参加を促し、学習及び実践活動を通して自然の大切さ・生命の大切さを学び、心身共に健全な子どもの育成を図る。そして豊かな自然環境を再生し、生態系の種の多様性を求める保護保全活動を、県内外に発信する起点とする。

(1)　観察会・研修会・生態調査活動　会員対象、一般市民対象→越冬幼虫の個数調査及び成虫個体数調査

(2) 保護活動 (違法採集者の監視活動) →成虫発生時の監視活動、成虫個体数の調査

(3) 保全整備活動→管理対象区域内におけるチョウの生態環境に伴う托伐作業

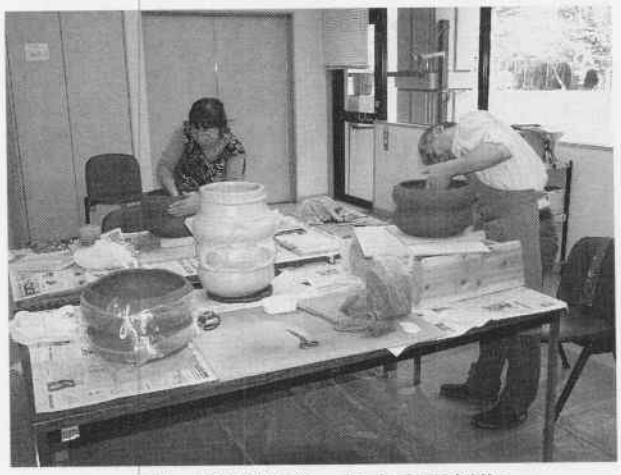
(4) 企画・広報活動→「花と蝶－春－」「花と蝶－夏－」写真展開催

(5)「こども自然探検隊」→動植物の共存・共生を原点としてこどもに観察・体験をとおした活動により「こども育成」を図ることを目的に昨年度設立した。

13　史跡探訪の会・土器づくり　　会員 4 名

縄文土器作りや野焼きの他、博物館の見学を行った。

(1) 縄文土器制作、野焼き 4/20、6/21 ～ 23、7/20、1/25 ～ /27



文化史跡探訪会　縄文土器制作

文化史跡探訪会　奈良県石舞台

(2) 埼玉県立博物館、さいたま市立博物館見学　5/18

(3) 高森町郷土資料館、箕輪町郷土資料館見学　7/27

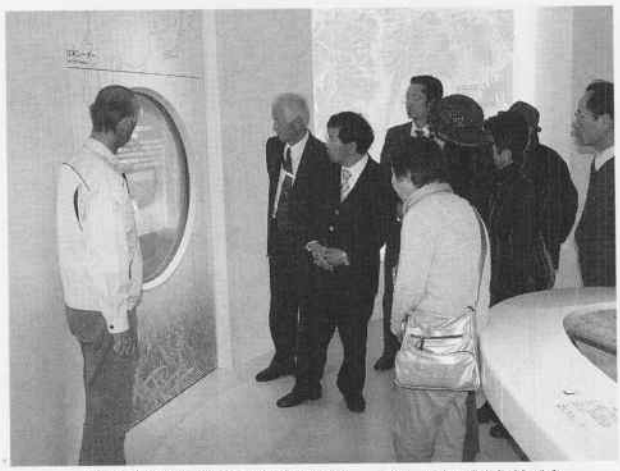
(4) 奈良県遺跡・博物館見学　12/6 ～ 9

14　博物館協議会

(1) 博物館協議会　　9/30(木)

(2) 博物館協議会研修視察…静岡市登呂遺跡博物館・東海大学海洋科学博物館

11/10(水)　　9名参加



博物館協議会研修視察　登呂遺跡博物館

15　博物館実習受け入れ

(1) 小川真由 信州大学理学部物理学科4年生

8/8(日) ～ 12(木)、8/21(土) ～ 28(土)

16　その他

(1) 鯉のぼりあげ　　4月13日～5月25日

市民から寄贈していただいた鯉のぼりを飾りました。

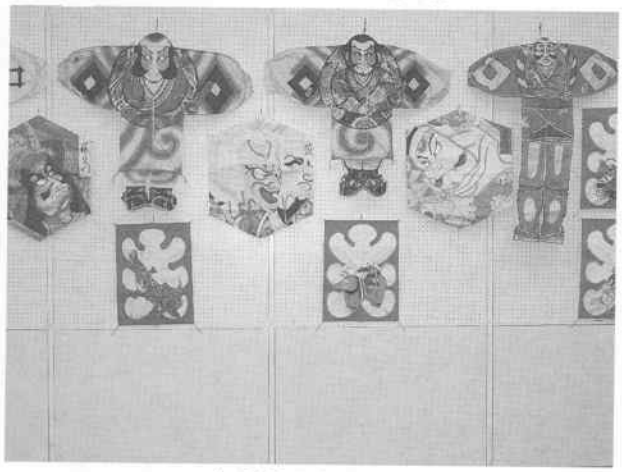
(2) 小泉山元旦登山・博物館まつり　1/1(木)　　350名

小泉山体験の森創造委員会が初日の出に合わせて小泉山に登る行事に共催し、博物館まつりを開催しています。前年の春に昔ながらの方法で作った自家製みそを使ってのすいとんの振る舞い、もちつき、コマや羽子板などの昔の遊び、絵手紙、琴の演奏やマジックショー、お楽しみ抽選会などが行われました。また、凧揚げの実演に合わせて創作凧や伝統的な江戸凧の展示もありました。

小泉山元旦登山

博物館まつり　絵手紙

創作凧



伝統的な江戸凧

一様ではなく三層より成っていること。
(2)島木の姓は居住する聚落の高木からの発想であり、大正二年四月の白樺の展覧会以降に発案されたこと。
(3)島木赤彦の名前は新しい世界に脱け出そうとする強い期待を込めたものであったこと。

○

大正二年の改名の時点で「赤彦」に込めた思いとは別の方向に赤彦は自分の歌の世界を進め、遂には「寂寥相」「幽寂境」といった枯淡の世界に理想を見出している。しかし島木赤彦の名前を死ぬまで変えることは無かった。すでに歌壇の大家として揺るぎもせぬ大看板となったネームゆえ替えようとしなかっただけなのか、それとも何か思う処があったのか、それは筆者にとって今後の課題である。

赤彦は世俗の苦しみに耐えられず、柵（しがらみ）の無いゴーギャンのタヒチへ行きたかったであろうが、それは憧憬の島であり、現実に可能な逃避場所が八丈島だったのであり、茂吉の言うように最初から八丈島が憧憬の地であったわけではない。東京より離れた島ならこの年の二月から七月にかけて北原白秋が滞在した小笠原父島なども考えられるが、八丈島より渡航は大幅に不自由であり、周到な準備が必要であって赤彦の突発的渡航には不可能であった。

突発的な渡航であり、一ヶ月滞在して帰京したに過ぎないが、それは予定の行動であった訳ではなく、十月二十三日の憲吉宛書簡の末尾に「島の学校早速には口無きが如し」とあり、長期の滞在も視野の内にあったことを伺わせ、ノイローゼ状態の強さが推測される。

○

「島」はゴーギャンのタヒチへの原始回帰への共感と憧憬に因るものであることは茂吉の言う通りだが、「木」はどこから来たものであろうか。島のイメージを伴った姓なら島木でなくてもよい。

島野、島居（井）、島出（手）、島田、島住などでもよく、島部（辺）というのも考えられる。赤彦の名前の由来を山部赤人への傾倒に求める説があるが、そうだとすれば島部（辺）など最適であろう。しかしこの説は後年の澄み冴えた声調を有する『太虚集』と赤人の歌調の共通に着目したもので、大正二年の改名の時点では赤彦の目指す世界は澄み冴えた世界ではなく、ゴーギャンやゴッホに魅せられた原色の赤の躍動する世界であり、赤人に倣った赤彦という発想はあり得ないことである。

世俗の柵に縛られた現実の人久保田俊彦から新しい世界に脱け出し飛翔し得るのが新ネームに求められる要素であり、三層からなる赤のイメージから赤彦の名が選ばれたのは前述したとおりである。「赤彦」に対応する姓もそれに相応しいものでなければならなかった。現世の赤彦は高木（本来の居住地たる聚落（むら））の久保田（姓）の俊彦（名）である。俊彦は赤彦に置き替えられ、姓に島を付すことも決まった。残るは高木と久保田に島以外の字を当てることである。高木の高を島に置き替えれば島木となり、久保田の久保を島に置き替えれば島田となる。赤彦の思考は島木赤彦か島田赤彦かの二者択一までに絞り込み、平凡な島田より原色の花にいろどられたタヒチの木のイメージを連想させる島木が選ばれたということであろう。

○

茂吉の前出の童馬山房夜話の一文は「シマギかシマキか」という題がついて、縁者、友人、門弟が清音、濁音夫々に発音して区別がつかず、赤彦本人も特に拘わらなかったことを記している。右に見て来たように島木の原形が聚落の高木から来ているとすれば高木の発音の仕方に倣えば正しいということになる。高木は正式にはタカキと清音であるが婿養子として赤彦が在住していた当時からタカギと濁音発音も通用していたようである。外来者である赤彦にとって正式呼称のタカキに拘ることなく、タカキと呼ぶ人にはそれで対応し、タカギと発音する人にはそれも是とし異をたてなかったのであろう。従って赤彦にとって我が住む聚落の変形である島木はシマキでもシマギでも良かったのである。

○

以上くどくどしい推論をまとめると次のようになる。

(1)赤彦の名は明治四十三年の時点ですでに発案されており、赤のイメージは

新ネームの名前は数年来醸成されていた赤彦に決定した。では上に冠すべき島木の姓は何時かと考えると、白樺展覧会以後、七月号原執筆までの間、大正二年四月下旬から五月下旬の一ヶ月の間と推測される。

茂吉は「島はゴーガンのタヒティへのあこがれから来たもの」と記しており、その通りであろう。しかし「赤彦の島といふのは八丈島で、その島の木は椿の花ぐらゐを写象したものであった。」と訳の分からぬことを続けている。八丈島は翌大正三年の秋の渡航を前提としたもので、島木赤彦改名の時点では赤彦の頭には無い存在であった。「島」はゴーギャンの絵から発想したが「木」は別のものからの発想と見なければならない。

赤彦の八丈島渡航が長年の憧れの結果でなく、切羽詰った突発的なものであったことを見てみよう。改名時に茂吉の言うように八丈島が想定されることが無かったことの検証である。

赤彦の八丈島渡航は大正三年教職（当時諏訪郡視学として仲々の地位）を辞し、上京して「アララギ」の編集に従事しながら下宿生活をしていた半歳後の十月二十一日から十一月十五日までの約一ヶ月間である。中原静子や金原夜汐への出発当夜のハガキには「急に八丈島へ行って参ります。」「例の遊び癖出で」とあるように周囲も多くは知らぬ突発的なもので、準備もほとんど無く、渡航後たちまち金に窮して中村憲吉らに金策を依頼していることからも無計画さが伺われる。

八丈島渡航の実情は帰京直後長塚節に出した書簡に次のように述べられている。赤彦が「アララギ」の専任編集者を表面上の理由として出京したのは「信州を抜け出し候は全く熱病患者なりしため」としている。なぜそうなったかの原因について大正元年十月の中村憲吉宛の書簡で「僕にも人に知れぬ苦しみがある。僕は自分で自分を棄ててしまわねばならぬ。僕の心の影は黒く暗い影法師だ。それを底へ押しこめて置いて平気な顔をしているのが悲しい。」と深刻な告白をしている。

そうした思いは明治四十五（大正元）年になると歌にも反映し

・このごろは多く曇れりおろおろに涙流れて籠る日もあり
・ひるの土に下駄の音して入り来つる人を誰かとひそみ居るなり
・まとまらぬ疲れ心のおぼろかに法師姿が見え来るかな
・生きてあらばこのはかな身のほそぼそに髪をおろして住む日もあらん
・今はこころ分らずなりぬ煙草をば吸ひ吸ふままに口苦がくなりぬ
・酒のめばほろほろ泣きぬ今は何もあきらめてある我が膝にむきて

と現世の自己放棄に繋がるような深刻というより異常な歌を詠んでいる。この頃すでにノイローゼ状態に陥っていたのではないかと推測される。

「人知れぬ苦しみ」が奈辺より生じたものか具体的に語ってはいないが、赤彦を巡る妻不二子と恋人静子との三竦み状態が根底にあったことは確かであろう。また郡視学として人事刷新に断を振うところからくる心労や人を裁く負い目も赤彦を苦しめた因と考えられ、加えて文芸で身を立てたいという昔年の思いが再び（明治四十一年の養鶏生活で一度失敗している）頭をもたげ、一種の狂躁（ヒステリー）状態に陥ったのが「熱病」ということであろう。

出京後のことは「此事他人に話さず居り候ため余計に胸苦しく、八月廿二日以降は昼寝（ね）ね、夜起きて暮し候様な状態になり、何も手つかず持て余し候」と深刻なノイローゼ状態であったことを告白している。赤彦は従来にも「脳神経と心臓疲労のため学校欠席」（明治三十三年）とか三十九年には病臥中（八月八日）に左千夫が来て一泊し、その後十二日に「脳病先ずほとんど快復し」といった書簡中の記事があり、この時もそうした生理状態に陥っていたものと思われる。

「結果悪しと知りつつ島へ渡ってしまひ申候。何も彼も噛み潰して忍ばねばならぬことよくよく分り居り乍ら自分でも心外と思ひ乍ら島へ行ってしまひ申候。」と自己コントロールを失った狂躁状態での突発的行動であった。

咲くらん森のおくどに」があり「中原なあ、二番目の歌はおめえに残したつもりだが」と言っている。

白桃の花に譬えられ、病弱ではかなげな中原静子は真っ赤な丹の花に譬えられている。中原本人の印象と相反する譬えは赤彦の中原に対する熱烈な恋心の現れであり、丹の花たる中原はその化身であって、離れてもなお永遠の恋人であり、広丘での恋の記憶の永遠性を歌っているのである。一年前の情熱、恋、新生という抽象的なイメージから中原静子という具体的な恋人のイメージが赤に付け加えられたのであり、赤彦の赤のイメージへの執着は生き続けて行くこととなる。

○

斎藤茂吉は「アララギ」連載の「童馬山房夜話」の昭和十九年七月号（その後『島木赤彦』に収載）で「赤彦といふ筆名はゴオガンのタヒティの島から暗示と感動を得たもので、赤彦の島といふのは八丈島で、その島の木は椿ぐらゐを写象したものであった。」と述べている。赤彦の名も島木の姓も同時に作られたとの見方であり、ゴーギャンの影響下にある大正二年五月頃の発案としている。しかしすでに見て来たように赤彦の発案は明治四十三年の初めまで溯るものであり、赤に様々なイメージを加えながら醸成されていったものの大正改元を迎えてもなお新ネームとして実現することはなかった。

新ネームの機運が兆したのは「アララギ」新人層のトップを切って『馬鈴薯の花』の発刊が具体化し、それを区切りとして新しい世界へ踏み込もうと意欲に燃えていたことの具体策として焦眉の課題となった。それは前述したように大正元年の終りから二年の初めにかけてのことである。

これに拍車をかけたのが白樺が企画したロダンの彫刻や印象派絵画の展覧会であった。赤彦は大正改元前後から西洋芸術、特に印象派の絵画に強く魅かれていた。大正二年二月八日から開催される白樺の展覧会は多忙ながらも夜行で上京しようとした程の熱の入れようだったが延期となり、開催が実現して赤彦が見学したのは四月二十日であった。その感想を「白樺展覧会は大へんよくありました。――中略――ゴーガンは南洋の島人となり土人を娶った。二度パリへ帰ったが誰も振向くものが無かった。ゴッホはしまいに狂人になってしまった。島崎さんは亡妻と子供を残して四年の旅に上った。自分の歌など未だのんき（・・・）なものである。アララギの歌は更に突き進まねばならぬ。」と強い衝撃を受けたことを中原静子に伝えている。

新しい世界へ突き進むためには旧套を脱ぎ棄てねばならず、古い殻の象徴である柿の村人から新ネームへの変更が急務となった。白樺の展覧会はそんな折のことであり、ゴーギャンの赤の世界に強い感動を受けたことから長年醸成されつつあった赤彦の名前が新たな意味を加えて浮上したのである。

赤彦の赤に抱くイメージは前述の

(1)生命、情熱、恋など新生をもたらすもの。

(2)丹の花に譬えた恋人としての中原静子のイメージ。それは同時に自己の恋心の強さの象徴でもある。

(3)ゴーギャンの赤の世界がもたらす原始への郷愁と西洋絵画への憧憬。

赤彦は「アララギ」七月号に赤彦と署名した「消息」に「ゴーガンの『画家の母』はいい絵だね。哀れで気の毒でなつかしい画だね。切ない堪へられない時はあの絵を思い出してゐる。」と共感の情を述べている。

赤の華やかさに照れる世俗さは払拭され、赤でなければならぬ必然さを持って赤彦の名が実現したのである。赤は単なるゴーギャンの絵からの思い付きに因るものではなく、三層からなる深い意味を蔵したもので、赤彦にとって不可欠の色であった。

○

従って新ネームは「馬鈴薯の花」が計画された頃から赤彦の胸中に発意されはじめたと思われる。大正元年十月二十二日の書簡に「冬中に我々の詩集を出す話をしてゐる」とあり、三十日には「十二月に斎藤、中村、古泉、柿人の四人の歌集を出版する」とあり、年末には歌集名は赤彦の推す「馬鈴薯の花」に決定した。しかし茂吉と千樫の原稿が纏まらず、逡巡する憲吉の臀をたたいて赤彦、憲吉二人の合同歌集とすることにした。十二月二十四日の書簡には「二十九日から役所休み、そうなれば『馬鈴薯の花』の原稿も書けます」とあり、具体的な作業が進捗し始めている。しかし長塚節の「土」を出版した関係で期待した春陽堂に出版を断わられ、赤彦、憲吉夫々五十円納める自費出版として東雲堂から出ることが決まったのが五月下旬であり、六月中には上梓されると思われたが、実際出来上ったのは七月十一日であった。

以上の経過からすれば大正二年五月には新ネームの島木赤彦は確定していたと考えられる。

○

しかし、島木赤彦は一気に大正二年五月頃作られたのではなく、かなり早くから名前にあたる赤彦は生まれており、姓の島木は大正二年五月頃作られたものと推測される。

川井（中原）静子の『桔梗ヶ原の赤彦』に「赤彦の名」と題する一文があり、次のような記述がある。

明治四十三年二月十一日の紀元節の夜、校長の赤彦と同宿していた広丘小学校の新任教師の中原静子は赤彦の部屋で紀元節の行事の四方山話の後、赤彦が中原の名前の手本を書いてあげようと筆の運びなど注意点を述べながら中原志づ古と書き「並べて柿の村人と書かれた。この名前もいやになったよと消しておしまいになり――中略――それから紅と赤の二字を並べて書き――中略――赤という字の下に彦という字を書かれた。『赤彦か、赤彦はどうだい。いい名じゃあねえかい。俺も気に入っているがなあ。しかし赤という字は考えものか。』――中略――続いて赤、一点、九月と一気に書かれた。」

この後中原静子へ「赤の一点がしみつきました」と愛の告白をする場面が続いている。この時赤彦にとって赤は情熱であり、恋のイメージと捉えられていた。世俗に疲れた三十男に若い血を蘇えらせ、恋の思いを募らせ、新しい世界に導く色と考えられたのである。しかしそれを世間に向かって発表するだけの決心までは育たず、赤の華やかさに途惑う気持ちが強かったことも伺われる。若がえろう新しい自分として再出発しようと心に期しながら、具体に移す強さまでには至らなかった。しかし赤のイメージに見出した新生への発芽は赤彦の胸中に徐々に醸成されていくのである。

「彦」は本人の俊彦の外次兄秀彦、三兄武彦、長男もまた政彦と名付けたように赤彦にとって最も馴染があり、執し愛すべきこだわりの字であった。長男政彦の政は養子先の久保田家伝来の字であり、それに彦を付けたところに赤彦の「彦」への執着振りが伺われる。

○

その後改名への具体的な動きはなく、柿の村人に終始していたが、「赤」へのイメージは新しいものが付け加わった。

前出の『桔梗ヶ原の赤彦』では「中原は白桃の花といった感じがする。――中略――中原ははかなくて影が薄い。」と赤彦の中原静子の印象を記している。中原は病弱であり、線が細く、名前通りの静かな寂しい存在であった。

一年後の四十四年春、赤彦は二年間の広丘小学校校長を辞し、郷里の玉川小へ転任する。中原との別れである。この間のことを赤彦は「林の村を去る」一連六首に歌っているが第二首目に「この森の奥どにこもる丹の花のとはに

「島木赤彦」命名考

伊藤　俊彦

明治以降文芸に携わる者を一口に文学者と呼び慣わしているが、彼らの署名には時代の反映が見られる。大別すれば文人墨客の流れを汲む存在と見做して雅号を用いた時代と西洋に倣って本名または筆名（ペン＝ネーム）を用いた時代に分かれる。紅葉、露伴、漱石、藤村といった明治からの文学者は雅号をもって署名とした。花袋や秋声など自然主義の作家も号を用いた。本名を用いたのは鈴木三重吉、野上弥生子、小内山薫らが明治四十年頃散見し、谷崎潤一郎が明治末年に登場、大正前期を代表する白樺派から一般化している。筆名も白樺派の里見弴あたりが走りであろうか。

歌人の場合も同様で鉄幹、子規、啄木、白秋、牧水等いずれも雅号である。本名を用いているが落合直文（萩之舎）、佐佐木信綱（竹柏園）、会津八一（秋艸道人）など別号を用いる場合もあった。斎藤茂吉も童馬山房主人と名乗ることがあった。

純粋に本名を用いているのは「明星」の女流の一部や長塚節らが古く、それに次いで吉井勇や川田順などが居り、「アララギ」派では中村憲吉や土屋文明がいる。

筆名を用いた歌人は伊藤左千夫や岡麓が走りであり、赤彦や古泉千樫などがこの派に属している。

○

赤彦も時代を反映した幾つかの雅号を経ながら島木赤彦という筆名に至り、死ぬまで変えることがなかった。赤彦の文学的出発は明治二十四年、数え齢十六歳の頃郷党の友人らと俳句を作り始めたことからで、骨笑という俳諧独特の剽げた号を用いていた。翌年から意識的に作詩、作歌を始め、父浅茅から旧派の和歌の手解きを受けている。二十六年になると諸雑誌に投稿するようになり、伏竜、伏竜樵夫の号を用いた。地に潜みながら他日を期す気概を込めたネーミングである。長野師範入学後は更に投稿熱が加わったが、二水、二水軒、山百合を用いるようになった。二水は郷里下古田を流れる柳川と上場沢川の間に居があることからの発想であり、山百合は深山に咲く百合の凛とした気品と清純さに己れの理想を託している。三十三年池田から玉川小に移り、岩本木外らと宿直の弥牟庵で文芸、教育を論じた頃から山百合を多用した。三十七年には柿村舎、柿村を、三十八年からは柿人、柿の（乃）村人を用いている。柿は本字の柹を用いているが、これは高木の養子先の屋敷に柿の木があり、また高木の聚落も柿の木が多かったことに因っている。後の柿蔭山房なる命名もこれと同じ発案である。柿の村人は正岡子規の竹の里人に倣ったもので、根岸短歌会ではポピュラーなネーミングであり、芋の花人、古沢芋人、田川の里人など類似のものが多かった。左千夫に親炙し、根岸短歌会になじむにつれ、生前会うことの無かった鼻祖たる子規への尊敬の念が増したことによる命名であろうか。或いは左千夫の亜流でなく原点に遡ろうとする意の表れであったのかもしれない。

○

島木赤彦と改名したのは大正二年の「アララギ」七月号からである。中原静子あての書簡に（これ迄千樫編集で遅刊、休刊がちであったが）七月号は茂吉の編集だから七月一日に発行できるだろうとあり、そうだとすれば原稿は五月末には書かれていたと推測され、その時点で新ネームの署名があったものと思われる。編輯所便で茂吉は「柿の村人は『馬鈴薯の花』を限界として島木赤彦となりました。」と記している。

目　次

紀　　要　第19号

平成23年3月31日発行

編集発行　茅野市八ヶ岳総合博物館

〒391-0213

長野県茅野市豊平6983番地

ＴＥＬ0266（73）0300

ＦＡＸ0266（72）6119

紀　要

第一九号《平成二二年度》

茅野市八ヶ岳総合博物館